神のみぞ知る碁

カトタンバ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『神のみぞ知るセカイ』の主人公である桂木桂馬が『ヒカルの碁』のあの女性キャラクターを攻略する物語。

それぞれの作品の時系列としては、

神のみぞ知るセカイ→女神篇に突入する前

ヒカルの碁→北斗杯が終了した後

このようになっております。

※２０２２年９月１９日本編完結。また、誤字報告ありがとうございました。

※２０２２年１０月１日及び２日にアフターストーリーを投稿しました。

目次

プロローグ ―― 1
FLAG．01 作戦会議 ―― 4
FLAG．02 落とし神と最強初段 ―― 8
FLAG．03 桂木と進藤 ―― 12
FLAG．04 追うはケイマ、逃げるは一間 ―― 17
FLAG．05 リベンジャー ―― 22
FLAG．06 ヒカルのみぞ知るセカイ ―― 26
FLAG07．広がる輪 ―― 33
FLAG．08 神の弱点 ―― 38
FLAG．09 一歩前進 ―― 43
FLAG．10 塔矢アキラは回顧する ―― 47
FLAG．11 理想の世界の住人 ―― 52
FLAG．12 Days ―― 56
FINAL FLAG 両ケイマ逃すべからず ―― 66
FLAG．EX1 第二回北斗杯（前編） ―― 73
FLAG．EX2 第二回北斗杯（後編） ―― 83

プロローグ

『ねえ？君は私と一緒に目指してくれる？神の一手を……』
「もちろんさ。この落とし神の名にかけて！」

舞島市のとある家宅。
優美な電子音が部屋に響き渡る中、高校二年生の少年――――桂木桂馬は力強い言葉を放つ。
現在この部屋には、ゲーミングチェアに座る彼以外の何人（なんびと）の姿も見えない。
しかし、当の桂木桂馬には決して独り言を口にしているようなつもりなど無かった。
彼はテレビゲームのヒロインと〝対話〟しているのである。
桂馬が現在プレイしているゲームのジャンルは「ギャルゲー」。一言で表せば、女性キャラクターとの恋愛を楽しむことを目的としたゲームの一種と言った所か。
ゲームのキャラに話しかけるなど、正常な感性を持つ人間から見れば面妖と言わざるを得ない光景であろうが、この少年は至って真剣であった。
それどころか世の多くの人間は何故自分のようにギャルゲーに没入することが無いのかと首を傾げている始末。
「ふふふ……ボクを信じていいのか迷う気持ちも分かるよ。でも死してなお囲碁への情熱を抱く君を必ず神の一手へと導いてみせよう！」
くいっと眼鏡の中央を指先で押して、きらんと瞳を光らせる。
言動こそ目も当てられないようなものであったが、その容貌は非常に整っていた。中性的な美少年である。
日頃の振る舞いさえ改めれば数多の女性が虜となることだろう。
ネット上にて桂馬は、（ゲーム世界の）いかなる美女をも落とす〝落とし神〟の異名で呼ばれている。もっともその正体を知る者は誰もいないが。
名の由来は、彼が運営するギャルゲーの攻略サイト「落とし神」に

あった。
　そのサイトは情報の質と量が図抜けており、最新作すらも発売日当日に全ての攻略情報が掲示される辺りに運営者の天才的な攻略手腕が伺える。
　そのため落とし神は、素性不明ながらも多くのギャルゲーマー達からまさしく神の如く崇められていた。

　そう、かつてネットを通して囲碁界を騒がせた最強の棋士〝ｓａｉ〟のように……。

＊＊＊

「ふぅ～～～～」
　今クリアしたゲームのエンドロールを眺めながらボクは一息つく。
　今日も無事に悩めるヒロインを救うことに成功したぞ……。
　しかし、古い作品とはいえ実にユーザー泣かせのゲームだったな。
　ＣＰＵと対局すると酷い時には１０分以上も長考するし、一局に何時間もかかる事もある。人間同士の対局ならまだしも、何故コンピューターが大してレベルの高くもない対局でこんなに時間をかけてくるのか？
　また、処理能力の問題なのか知らんが、こちらが勝っているはずなのに持碁として引き分け扱いにされる事もあった。一体何度やり直したことやら……。
　だが、そんなことはボクには関係無い。
　この世には悪いゲームはあっても悪いヒロインなど存在しない。救いを求めるヒロインがそこにいるならボクは諦めずに挑み続けるだけだ！
「神にーさまー・いますか～？」
　今日も来やがったな……。ボクの何より尊いゲームタイムを脅かす疫病神が。
　本当なら無視してしまいたいんだが、そんなことをすると後々もっ

と面倒なことになるのは目に見えていた。
「何だエルシィ？一体どうした？」
ちょうど先程のエンディングを見終わったタイミングだったこともあり、ボクは渋々自室から顔を出して問いかける。目の前の女――――エルシィことエリュシア・デ・ルート・イーマに。
どうか頼むから他愛の無い用事であってくれ。例えば面白いテレビ番組があるから一緒に見たいとか。
また面倒な任務に奔走させられるのは御免だからな？
「駆け魂が取り憑いてる女性をまた街で見付けちゃいました！お名前は奈瀬明日美さんという方だそうです！」
ボクのゲームの時間がまた削られることが確定したらしい。
……やっぱり現実（リアル）なんてクソゲーだ！

FLAG・01　作戦会議

「駆け魂（たま）」とは大まかに言えば地獄から抜け出した邪悪な魂のこと。身体を取り戻して再び悪事を働くべく人間界へとやって来る。

深い苦悩を抱く人間の心のスキマを隠れ場所としており、心のスキマに由来する負のエネルギーを糧としている。

専ら女性をターゲットとするのは、宿主の子供として転生するためだ。

死者の魂を浄化する役目を担う新地獄の冥界法治省は、駆け魂を捕らえるため新悪魔による部隊を編成した。その部隊名が「駆け魂隊」である。

駆け魂が巣食っている女性の心のスキマを満たすことによって駆け魂を取り出し、そのまま捕縛するのが駆け魂隊の任務となる。

駆け魂隊の一員であるエルシィ及び協力者（バディー）たる桂木桂馬は、主に女性の悩みに寄り添いつつ恋愛状態にすることで心のスキマを埋めてきた。

大変強引な形で協力者にさせられた桂馬は、当初は嫌々エルシィに手を貸していたが……

＊＊＊

「で？その奈瀬明日美とやらの情報はあるのか？」

「ありますよ！にしても神にーさま、最近は割と素直じゃないですか？」

「……もうゴネるのも面倒になってきたんでな」

断じて使命感に目覚めたわけではない。

もし事態が悪化すると命を失うというペナルティさえ無ければ、理想の２Ｄ女子を差し置いて現実の３Ｄ女を口説き続けるなんて馬鹿馬鹿しいこと誰が続けるか……。

ボクの諦観を知ってか知らずか目の前の悪魔、いやバグ魔はニコニコと情報を羅列する。

「奈瀬さんは神にーさまの一つ歳上の高校三年生。誕生日は5月10日で、血液型はB型。家族はご両親とお兄さんと弟さんがいるそうです！」
「……またその羽衣でスキャンしたんだな？相変わらず便利なこった。他には何か目ぼしい情報あるか？」
「はい！羽衣さんで透明化して後を付けてたんですけど、どうやら囲碁が大好きみたいですね～」
「囲碁？」
「あの黒い石と白い石を交互に置いていく遊びです！それを学校から帰って毎日のようにやってましたよ！」
　囲碁ねぇ……。今さっき囲碁が題材のギャルゲーをプレイしたばかりだ。
　ついこの前に将棋女を攻略して今度は囲碁女がボクの前に立ちはだかるとはな。
　ゲーム世界の神を名乗る者として、たとえボードゲームであろうとも挑戦を受けて立とうではないか。
「そいつは囲碁は家でやってるのか？」
「いえ、流石に家の中ではどうか分かんないですけど、なんかお店みたいな所に入ってやってました。同じ場所で他にもたくさんの人がしてましたね」
　ふむ…。碁会所という場所で碁が打てるというのはどこかで聞いたことあるぞ。
　まずはそこに行って情報収集と洒落込むか。
「それ場所はどの辺か覚えてるか？」
「はい！バッチリです！」
　ちょっと見直したぞエルシィ。では早速出発だ！

　……さて、奈瀬の行きつけらしい碁会所に行ってきて、何局か打ちつつ席亭や客から彼女の話を聞いてきた。人当たりの良いエルシィも連れて行って警戒心を解したのが功を奏したな。

彼ら曰く、どうやら奈瀬はただ碁を打つのが好きなだけではなく本格的にプロを目指しているらしい。
それでプロの養成機関である「院生」に所属しているそうだ。そのため彼女は定期的に日本棋院へと通っているという。
そして、奈瀬はもう何年も院生であるにも関わらず、未だプロになれていない。更に今年１８歳の彼女は、院生でいられる最後の年度であることを度々愚痴っているとか。
こうした事情による焦りや絶望が心のスキマに繋がっている可能性が極めて高いな。
ならばボクは、奈瀬の攻略を本格的に始める前に囲碁で彼女を鍛えることが出来るくらいの棋力は身に付けておいた方がいいだろう。
棋力を上げるにはどうしたものか……。
「でも神にーさまはもう充分強いんじゃないですか？さっき碁会所のおじさん達に勝ちまくってましたよね？」
「言い方は悪いが、あれくらいの相手に圧勝した所で充分とは言えん。奈瀬の指導に当たるには余裕でプロになれるくらいの実力が必要だ」
ボクはネットを立ち上げて色々と調べる。
本当はボク自身が院生になってしまえば色々と手っ取り早いんだが、院生試験にも年齢制限があるからな。１４歳をとっくに超えてしまっているボクには受験資格が無い。
となると残された手段の一つとしてプロを自宅に呼んで指導を受けるのが安牌なんだろうが、一体誰に依頼しようか？
それなりに高名なプロだと相応の報酬を渡さなければならないはず。幾ら”Ｍ資金”があるとはいえ、今後買う予定のゲームのことを考えるとあまり出費はしたくない。
かといってあんまりヘボでもそれはそれで非常に困る。
「前も思ったけどＭ資金って一体何なんですか？」と聞いてくるエルシィをスルーし、ボクは自分の目的において最適な棋士を探し続ける。
そこでボクは一人の男に目を付けた。

この進藤ヒカル初段に……。

ＦＬＡＧ．０２　落とし神と最強初段

「神にーさま、その進藤ヒカルさんって方もやっぱりおじさんなんですか？」
「いや、ボクの一つ歳下らしい。中学三年生の４月にプロになって一年余りって所か」
「ええ～じゃあ進藤さんは中学生でプロになっちゃったんですか!?」
「囲碁の世界では割と普通のことらしいけどな」
　ボクは日本棋院に諸々を問い合わせた後、早速進藤ヒカルに指導を依頼して、自宅で母が経営している喫茶店に呼んだ。
　もうじき約束の時間だ。まあ、空いている席に座ってゲームをしながらゆっくり待つとしよう。
「でも、その人は初段ってことはあんまり強くないんじゃないでしょうか？初段ってつまり一番下ってことですよね？」
「それがその進藤は今年、囲碁の国際ジュニア大会の日本代表メンバーの一人として選ばれたそうなんだ」
「はえ～すっごいです！それで優勝とかもしちゃったり？」
　やはり碁のことを全然知らない者でも「国際大会」と聞くと、何となく凄さが伝わってくるらしい。
「いや、二回対局して二回共負けてしまったそうだ」
「……それじゃやっぱりあんまり大したこと無かったのでは？」
「フンッ…勝敗でしか力を測れない素人め」
「にーさまも素人じゃないですか～」
「愚かな悪魔よ……ボクは素人などではない。何故ならゲーム世界の神だからだ」
　ブツクサとむくれるエルシィは放っておいてボクはゲームを続ける。
　進藤が大会後半で対局した韓国チーム代表の人物は、調べれば調べるほど化け物としか言いようの無いキャリアの持ち主だった。
　韓国において既にタイトル戦に挑戦しているトップ棋士の一角だという。そんな奴を相手にして互角に渡り合い、極限まで追い詰めた

進藤の力は下手な高段者を容易く凌駕するだろう。
噂では進藤は、囲碁界の寵児とされる塔矢アキラとほぼ同等の力を持つとか。
そんな実力者であろうとも段位としては初段なので、指導料はそこまで高額を請求されないだろうと読んでいたが、まさにその通りであった。
ちなみに塔矢アキラの父である塔矢行洋のことは囲碁に普段あまり興味が無いボクでも名前くらいは元から知っていた。
引退した時はニュースで大騒ぎだったからな。人気アイドル中川かのんを知らなかったようなボクですら、その名を知る程に。
それはそうとして、エルシィの奴はまだ仏頂面だ。まあ、ここは適当におだててておくか。
「お前が駆け魂の主を見付けてから先に色々と調べてきてくれて助かったよ。おかげで方針を迅速に決められた。成長したな、エルシィ！」
すると顔を赤らめて照れ始めた。やっぱりこいつはチョロイン気質だな。
駆け魂持ちの女達も毎回これくらいチョロかったら助かるのに……。

そして、ここで店のドアが開いた。髪色が前側だけ金髪のあいつで間違いない。
どうやら無事にご到着のようだ。

＊＊＊

舞島市にあるカフェ・グランパにオレは今辿り着いた。時間帯のせいか客は全然いない。
あそこに女の子と一緒に座っている眼鏡の人が桂木桂馬だろうか？
彼が手に持っているのは確か携帯型ゲーム機のＰＦＰか。オレは

もう当分この手のゲームをやっていないから詳しくは知らないが。
「あの～すいません。桂木さんですか？」
「ああ、そうだが？」
「オレ、進藤ヒカルです！囲碁の指導に来ました！」
相手と歳が近いせいかうっかり敬語が抜けそうになったけど、何とか問題無く挨拶出来た。
「ボクは桂木桂馬で、こっちは妹の桂木エルシィだ」
「にーさまのことをよろしくお願いします！」
元気いっぱいな妹さんだな。
「じゃあ、そこに座ってくれ」
「はい！」
オレは桂木さんの対面に腰を下ろす。テーブルを挟んで向かい合う形となった。
それにしても改めて桂木さんを見ていると、海王中の囲碁部の大将だった人のことを思い出してしまう。確か岸本って名前だったっけ？
この澄ましたエリートっぽい雰囲気がなんかちょっと似てる気がするんだ。
「桂木さんって碁の経験はどれくらいありますか？」
オレは早速本題に入る。
「ゲームでなら数え切れないほど打ってきたかな」
「囲碁のゲームですか？」
「というより囲碁がシナリオに絡むギャルゲーだ」
「……ギャルゲー？何それ？」
「何!?君はまさかギャルゲーというものを知らないと言うのか!?」
桂木さんは突然席から立ち上がって叫んだ。
まるで1＋1の計算が分からない相手を前にしたかのような驚愕と憐憫の込められた目でこちらを見下ろしている。
え？オレ何かマズいこと言っちゃった？
「はぁ～…進藤プロには基本的な所から教えねばならぬようだ」
いや、今日はオレが碁を教えに来たんですけど？

桂木さんのギャルゲー講座はその後おそらく１０分以上は続いた。ギャルゲーの歴史を説明するためにどこからか紙芝居まで持ち出してきたのにはビビったもんだ。

とりあえずギャルゲーというのが女の人との恋愛を楽しむゲームだっていうのは何となく理解出来た。

痺れを切らした妹さんがストップをかけてようやく話は終わる。

……前言撤回。この人は海王の大将とは似ても似つかない。

「それで棋力がどのくらいなのかは分かりますか？」

「まあ少なくとも碁会所の客達ならば圧倒出来るくらいには強いな」

なるほど。ゲームだけでそこまで強くなったのなら大したものだ。桂木さんには素質があるのかもしれない。

それにしても碁会所の客を圧倒って聞くと、プロ試験の本選前に和谷や伊角さんと碁会所巡りをした時のことを思い出すなぁ…。

何にせよまずは一局打ってみるとしよう。

「で、碁盤はどちらに？」

「ん？碁なんてゲームの中で打てるじゃないか」

そう言って目の前の男はＰＦＰを軽く掲げてみせた。

ああ……こりゃ教えるのは色々と大変そうだ……。

ＦＬＡＧ．０３　桂木と進藤

結論として、進藤がたまたま持ってきていたマグネット碁盤で対局することとなった。
「置き石は４つか５つでいいですか？」
「いや、ハンデはいらん。まずは互先で打たせてくれ」
ボクが黒番（先手）で打つことになった。
碁笥（ごけ）に手を入れて早速一手目を打とうとしたが……
「あっ！待って、待って!!」
進藤が慌ててボクを静止した。
「どうした、進藤プロ？」
「対局する時にはまずは『お願いします』って言わないと！」
そんなことか。
ゲームでは大抵テキストでさらっと流されていることだから忘れていた。
碁会所で打った客達にも指摘されていたことだった気がする。
少々手間に感じなくも無いが、ボクとてギャルゲー攻略における作法を軽んずる輩に好感は持てないからな。それと同じようなものだろう。
「分かったよ。お願いします」
「…お願いします」
しかし、変わった奴だな。
依頼者のボクに対する敬語を時折うっかり忘れてしまいつつも、碁打ちとしての儀礼には強くこだわるとは……。
まあ嫌いではないけどな。
それにボクが初心者丸出しの手つきで碁石を置くのを見るこいつの眼差しは何だ？
ボクが碁会所で対局した連中は、こちらの親指と人差し指で摘まむような持ち方に苦笑したり鼻で笑ったりしていた。まあどいつもこいつも中押し勝ちしてやったがな。
だが、こいつは碁会所の客達のいずれとも違う。断言は出来ない

が、どこか懐かしんでいるような……そんな目に感じる。
単に自分が初心者だった頃のことを思い出しているだけと解釈するのが無難か。でもボクには、ただそれだけの単純なことではないように思えてならなかった……。

「やはり負けてしまったな、やれやれ」
対局終了。6目半差での敗北であった。
無論ボクが負けること自体は最初から分かり切っていたが、ここまで手玉に取られるとは夢にも思っていなかった。
おそらく進藤は本気になればこの更に何倍もの差を付けてボクに勝つことも出来ただろう。
ところが、敢えてそれをせずボクに歩調を合わせつつ、様々な局面でボクがどのように打ち返してくるのか確認するかのように盤面を操作していた。
常にボクより一段だけ高い所に立って、力量を正確に見極めるべく目を凝らしていたというわけか……。
うむ。店内はちゃんと冷房は効いているが、一応蒸し暑い季節なので何か飲み物を持ってきてやろう。ここに来てすぐに何か出してやるべきだったな。
そうしてボクが立ち上がろうとすると今度は……
「えーっと…投了する時には『ありません』か『負けました』って言って欲しいんだ。一々うるさくて本当にごめん…」
「……すまない。負けました」
「ありがとうございました」
なるほど。勝者も敗者も礼を尽くすというわけだな。
「じゃあ何か飲みたい物はあるか？今回はオマケということで飲み物一つ無料（タダ）でいいが」
「ホントに？あ、いやホントにですか？」
「今また敬語が取れてたぞ？」

「あ、すいません！」
　何とも落ち着きの無い奴だな。碁を打っている時の怜悧な面持ちはどこへやら……。
「この際だから言っておくが、別にボクに敬語なんか使わなくてもいい。名前も呼び捨てで構わん」
「ありがと！じゃあ桂木って呼ばせてもらっていいか？」
「ああ、いいぞ進藤。それで飲みたい物があったら、そこのメニューから選んでくれ」
　ついでにボクもこいつを一々「進藤”プロ”」と呼ぶことは止めにしよう。
　何だか無用な距離感を生む呼び方に思えてくる。
「ならこのアイスコーヒーお願い！」
「了解」
　ちなみにエルシィは、ボク達の対局が開始されて早々は興味深そうに見つめていたが、すぐに飽きて他のテーブルでうたた寝している。
　まあ囲碁が分からなければただ黒石と白石をあちこちに並べ合ってるようにしか見えないだろうし無理からぬことか。
　しかしまあ、他人にこいつを妹だと紹介することにほぼ抵抗を感じなくなってきている自分が怖い……。
　そんなエルシィを尻目にボクは、店の奥の厨房で料理の仕込みをしている母さんに代わってコーヒーを淹れた。
「ありがとう。……にしても桂木ってアマチュアにしては凄まじい強さだな。置き石を４つか５つっていうのは流石に舐めすぎてたぜ」
「フッ…伊達に碁が絡むギャルゲー作品全てをＣＰＵのレベルＭＡＸでコンプリートしてはいないさ」
　中には碁の部分の難易度が理不尽に高すぎるあまり発売後すぐに修正パッチが配布されるような作品まであったが、そういった類いのパッチが配布される前にクリアしてしまうのがボクなのだ。
「正直お前はこのまま外来でプロ試験を受けたとしてもよっぽどのことが無ければ合格するレベルだ。全勝合格いけるかまでは分からないけど」

「……流石にまさかそこまでとは思わなかった」
　これは計画を少々早めることを視野に入れるべきかもしれない。探りを入れておきたいことも一つあるしな。
「師匠無しでここまで強くなっちゃうなんて桂木はホント天才だよ」
「お前も師匠はいなかったと聞いたが？」
「オレはまあ……色々あるからさ」
　何だ？歯切れ悪いな。
「そうか。じゃあさっきの一局の検討にさっさと入るか」
　ボクは再び進藤の正面に座った。

「白の両ガカリに近い攻めに対する黒の動き。オレも見たことないけど上手い応手だったよ」
「桂木はここでケイマで攻めてきた。定石通りの手もちゃんと打てるんだね」
「将棋だけでなく囲碁にもケイマというのがあるんだな」
「うん。ちなみに桂木の下の名前は将棋の桂馬から来てたりするのか？」
「いや将棋とは関係無くて、ゲーマーをもじったものだと若木先生がご自身のブログでおっしゃっていた」
「誰だよ、それ……てか、このコーヒー美味いじゃん！」
　コーヒーの淹れ方は母さんに叩き込まれているからな。
　それにしても最初は別に大して期待もしていなかったが、碁を打った後の検討というのも案外面白いものだな。
　ギャルゲーで様々なルートを攻略する上での解法についての考察と近いものを感じる。
　そして無事に検討も終えた。そろそろさっきのゲームの続きがしたい。
「ふう……。今日は一局しか打ってないが、初回だしこれで終わりにさせてくれないか？」

「ああ、分かった。それでお前に並べておいて欲しい棋譜を今日持ってきてるんだ」
「棋譜？」
　進藤はバッグから何枚かの紙の束を取り出した。どうやら棋譜をコピーした物らしい。
「本因坊秀策って知ってるか？」
「いや、知らないな」
「……そうか。江戸時代の御城碁で無敗だった人なんだ。一言で言っちまえば最強の棋士さ」
「そこまでなのか。その秀策の棋譜を学べばいいんだな？」
「そういうこと。言っとくけど、次に打ってる最中にそれとなく碁の中でテストしかけるからサボっても分かるぞ？」
「チッ…」
　どうやらボクのゲームの時間がまた削られてしまうようだ。
　ただ今は一つ気がかりなことがあった。
「なあ進藤、お前は秀策に何か思い入れでもあるのか？」
「え……？何で？」
「別に。何となくそんな気がしただけだ」
　ボクが本因坊秀策を知らないと言った時、こいつが僅かに悲しげな目をしたのを見逃さなかった。
「なんというか秀策は……オレが碁を打つ理由なんだ」
　意味はよく分からなかったが、安易に踏み込むのは止めておくか。
　進藤が何かを背負っていることが何となく伝わったから。大事な何かを真剣に背負っていることが……。

　さて、それよりボクはボクで攻略のためにそろそろ一つ布石を打つことにしよう。

ＦＬＡＧ．０４　追うはケイマ、逃げるは一間

「ええ!?もう奈瀬さんにアプローチするんですか?」
「そうだ。そろそろ第一フェーズに入ろうと思う」
「でも、そういうのはもっと強くなってからにしたいって神にーさまは前に言ってませんでした?」
「進藤曰くボクはもうプロ試験に問題無く合格出来そうなほどの実力はあるらしいからな。それに……彼女の心のスキマについて一つ確かめておきたいことがある」
「確かめておきたいこと?」
「エルシィ……奈瀬と接触するためにお前にも協力してもらうぞ?」

＊＊＊

棋院での本日の院生研修が終わった。
「じゃあね奈瀬さーん!」
「また明日ね、フク」
朗らかに手を振るフクこと福井雄太に私も応える。
……情けない嫉妬心を覆い隠すように精一杯の笑顔を作って。
今年は私が院生でいられる最後の年。
プロ試験自体は来年以降も受けられるが、自分が院生を出た後に伊角くんのように外来でやっていくことなど実力的に絶対無理だ。
だからこそ、まだまだ院生で在り続けられる年齢であるばかりか、棋力も順調に伸ばしているフクのことが羨ましくてたまらなかった。
院生の仲間達は次々と合格を決めていく。
一昨年に合格した進藤、和谷、越智は三人共私より歳下だった。特に進藤は、合格時には囲碁を始めてから2年と経っていなかったという。
去年に合格した伊角くんと本田くんは長年院生で一緒だった。彼らも自分達はもうプロにはなれないのではないかとずっと思い悩んでいたから、二人が遂に合格を決めて嬉しかった反面、取り残された

ような気がして寂しかった……。
岸本くんや飯島くんは自分の才能に早々に見切りを付けて院生を辞めていったが、私もそうすべきだったのかもしれない。囲碁自体はアマチュアの身でも楽しめるのだから。
でも今更後には戻れない。碁にばかり人生を費やしてきたのに院生を辞めてしまったら勿体無いという思いが私の中にある。
何年もの間、院生研修を優先したために毎週日曜日と第二土曜日が潰れてきた。友達からイベントに誘われようと、様々な学校行事があろうと、そのほとんどを我慢した。
空き時間だって大半は碁の勉強をするか、学校の課題を片付けるかで埋まってしまう。
恋愛だってろくにしたことが無い。一昨年の冬に友達からの紹介で試しにデートした男は、どうしようもない小心者であり、私をあんな碁会所に置いて一人そそくさと逃げ帰る始末。結局今の私には囲碁しか無いのだと悟った。
もし院生を辞めたら、今まで色々と抑えてきたことが全て無駄になってしまう。だけど、院生でいられる時間はもう後残り僅か……。

そうやって考え事をしながら歩いていたからだろうか？
まるで見えない何かに足を引っ張られたかのように、何も無い所でいきなり転倒しそうになってしまった。
それをたまたま私のすぐ傍にいた人が受け止めてくれた。
「あ、すみません！」
「いや大丈夫」
私を支えてくれたのは眼鏡をかけた男の子だった。
年齢的にはおそらく和谷と同い年といった所だろうか？端正な顔立ちの少年だった。
彼に身体を抱き止められた状態のままだと私はすぐに気付いて赤

面する。
「ありがとう！もう問題無いから！」
そうやってパッと離れる。
すると彼は意外な提案を持ちかけてきた。
「君はもしかして院生か？」
「うん、そうだけど？」
「ならあそこの一般の人が打てるスペースでボクと一局打たないか？腕に自信があるんだ」
「へぇ……」
これが単なるナンパなら流石にお断りしていた所だったが、碁となると話は別だ。
院生に挑むなど蛮勇であると、この身の程知らずに思い知らせてやろうではないか。

「……ありません」
無力さを思い知らされたのは私の方だった。４目半の差で敗れてしまった……。
しかもムカつくことに目の前のこいつはゲームをプレイしながら打っていた。まるで私相手には全力を出す必要など無いと言うかの如く。
対局中、緩み切った表情でニヤニヤしながらゲーム画面を見つめている目の前の男を殴りたくなったのも致し方ない話だろう。
それでいて私よりも短い思考時間で厳しい一手を放ってくる。
……こいつ一体何なのよ。
「お前の年齢なら院生に長年いたはずなのに大したことないな」
聞き捨てならない一言に私は目を剥く。
「何よ！今のはあんたが単なる初心者だと思って油断しただけよ！」
そうだ。この男が如何にも不慣れな感じで碁石を持つから油断して、序盤は緩い手を打ってしまったのだ。

最初から本気で打っていればこんなことには……
「…じゃあな」
「待ってよ！もう一局私と打ちなさい！」
私は勢い良く立ち上がって叫ぶ。盤上の碁石が振動でカタカタ揺れた。
同じ部屋にいた他の人達は一斉に私の方を振り返り、奇異の目で眺めていたが、今の私にそれらの視線を気にする余裕なんて無かった。
「明日だ」
「え？」
「明日もお前は院生研修の日だろ？終わる時間に待っててやるよ」
「……分かったわ。逃げるんじゃないわよ？」
「もちろんさ」
私はその場で立ち竦みながら、あいつが帰路に着くのを見守った。
自分を負かした相手の名前を聞いていなかったことにすらしばらく気付かずに……。

＊＊＊

……まあ、今の所はまずまず思惑通りだな。
エルシィは透明化させた羽衣によって指示通りにボクが奈瀬と関わるきっかけを作ってくれたようだ。
そして彼女に対局で勝利して徒(いたずら)に煽ることで、リベンジのためにボクと再び会いたがるよう仕向けることに成功した。
ちなみに後々の展開まで考えると、仮にボクの立場で友好的な関係を奈瀬と結ぼうとするような奴がいたなら、そいつはギャルゲーマー失格だからな？
ロビーに待たせておいたエルシィをボクは探す。
すぐに見つかったものの、あいつはどうやら他の人と熱心に話し込んでいるらしい。
エルシィの会話相手は「妖怪ジジイ」という形容がぴったりなほどの古色蒼然とした老人だった。

ネットで棋士の情報を適当に漁っている時に彼の写真をチラッと見た……気がするが、誰だったか思い出せない。
「じゃあサヨナラじゃの。お嬢ちゃん」
「はい！楽しいお話たくさん聞けて良かったです！」
エルシィはこちらへ駆け寄ってくる。
まったく…誰とでもどこにでも適応力の高い奴だ。そのおかげでこっちも何かと助かってはいるが。
「何の話をしてたんだ？」
「なんかあのおじいちゃん、この世の者とは思えない気配が私から漂っているとか言ってました。しっくすせんすでそう感じたとか何とか」
「はぁ？」
「もしかして私の正体がバレてしまってるんでしょうか……？」
「そんなわけないだろ……何がシックスセンスだ」
ボケ老人の戯言に付き合うほどボクは暇じゃない。
さあ早く家に帰って、進藤が寄越してきた棋譜を並べないとな。
……もちろん今積んでいるソフトを幾つか片付けた後で。

FLAG・05　リベンジャー

――翌日――

ボクは約束の時間に棋院を訪れた。
奈瀬明日美は既に一般用対局スペースの入り口の前で待ち構えていた。
腕組みをし、刺々しい気色を隠そうともしていない。
「来たわね？」
「当然だ」
視線の交わりは一瞬だった。
どちらともなく目を逸らして、奈瀬は対局場へと入り、ボクもそれに続く。
互いに挨拶も挑発すらもせず対局へと移る。余計な能書きなど不要だ。
「お願いします！」
「…お願いします」
ニギリの結果、ボクが黒となった。第一着は右上スミ小目。
対する奈瀬は、左下の星に自身の第一手目を力強く打ち込む。さながら稲妻の如く。
彼女の視線は針のように鋭い。まるでこちらを射殺さんとするかのように。
絶対に負けられないという強い気迫が伝わってくる。
見直したよ、そんな表情（かお）が出来るなんて。
小ゲイマかかりに対するコスミ。
ヒラキとハサミを兼ね合わせた一手。
これら本因坊秀策の棋譜から学んだ打ち筋に対して、奈瀬は必死に食らい付いてくる。
ボクには昨日のようにゲームに感情移入しながら楽しむような余裕が無い。それどころか操作の手を止めて思考せざるを得なかった局面も幾つかあった。

もしボクが昨日と同じような感覚で打っていたら万が一ということもあったかもしれない。
それほどまでに今日の彼女の集中力は、昨日とは段違いだった。
とはいえ、ボクと奈瀬の実力差は気持ち一つで埋められるようなものではないのも事実だった。
中盤を境に徐々に差が付き始める。彼女の頬を汗が伝う。
そして戦いが終盤に近付いた頃。
囲碁にはタイミングによっては、低く潜れば相手の石を厚くして自分が損になってしまうというセオリーがある。
ボクはそれを敢えて無視して上隅の地を抉り、厚くなった外の石を攻めていった。不意を突かれた奈瀬の形が崩れる。
時として悪手にしか見えないような手を放ち、臨機応変にセオリーを崩す。それは進藤の得意技だった。ここに来て進藤の手解きが生きてきたのだ。
彼女は一縷の望みを繋ごうと隅の眼を狙うが、ボクはそれをスルーして中央の囲いを補強して砦を築く。
生憎ながらタワーディフェンスでボクが敗北を喫したことは、この17年間の人生において一度も無い。
これにて終局（ゲームオーバー）だ。

＊＊＊

……負けた。こんなムカつく奴に。
悔しい…とにかく悔しい！死ぬほど悔しい！
負けをこんなに悔しく感じるのなんて一体何年ぶりのことだろう？
ここ何年かはプロ試験で不合格が確定した時にすらここまでの悔しさは感じていなかったと思う。
ただ溜め息をついて冷めた諦観を吐き出していただけだったはずだ。
でも今は自分の心の中で炎のような激情が渦巻いている。

ゲームしながら下手な手つきで碁を打つようなふざけた奴に敗れた自分が許せなくて……長年院生で燻っていることを馬鹿にしてきた奴に敗れた自分が許せなくて……。

こうして再戦を挑んだのに結果はこの様。昨日より3目分も差を広げられた7目半差での敗北だった。

死に物狂いで打ったのにこんな滑稽な話があるだろうか？

俯いた私の視界が滲んでゆく。目頭が熱い。喉の奥から何かが込み上げてくる。

この身の内側で直接心を握り潰されたように、全身がぎゅっと苦しくなる。その苦しさはどんどん勢いを増していった。

唇を噛み締めて堪えても、目から涙が溢れてしまう。最初の涙が零れると、後はもう止め処が無かった。

恥も外聞も無く嗚咽を漏らす。弱くて脆い自分がただ憎い。

もはやほとんど意味が無くとも顔にハンカチを押し当てて、私はずっと泣き続けた。

そのまま何分、いや下手すりゃ何十分と経った頃にふと私はハンカチを取り去って顔を上げてみた。

するとそこにはあの男の子がまだいた。何食わぬ顔でゲームをしている。

「あんた……まだ帰ってなかったの？」

「悪いか？」

「私を馬鹿にしたいわけ？」

「いや検討をまだしてないからな。昨日の一局も今の一局も」

「私はそんなのやりたくない！」

「そんなこと知らん。ボクがやりたいんだ」

「だからって……」

「昨日も今日も勝ったのはボクだ。それに今日はお前の要望に応じてここに来た。多少はボクの我が儘を聞いてくれてもいいんじゃないか？」

そこで彼はゲームの画面から顔を上げ、真っ直ぐにこちらを見据えてきた。

眼鏡越しに光る綺麗な瞳に不覚にもドキッとする。
「それに負けて悔しかった一局から目を背けて逃げるようなタマじゃないだろう？お前は」
無言で頷く。
そうだ、このまま負けっ放しでいられるか！
「そういえばまだ名乗っていなかったな。ボクの名前は桂木桂馬。まずはお前の名前を教えてくれ」
迷わずこちらも名乗った。
そして、私は桂木と打った二局について彼と意見を交わし始めたのであった……。

「だから、ここはあの時にこう置けば……」
「ホントだ！そんな前から対処しとかないといけなかったんだね」
「その通り。ここが安置だったというわけだ」
「あんち？」
「ん？安全地帯を意味するゲーム用語に決まってるだろ。こんなの常識だぞ」
「いや知らないから！そう言うあんたは囲碁用語をもっと覚えなさいよ！」
……何だかんだでやっぱり桂木はムカつく奴だった。

ＦＬＡＧ．０６　ヒカルのみぞ知るセカイ

どうも奈瀬の碁に対する姿勢が最近変わった気がする。
和谷のアパートの部屋での研究会で彼女を見ていて、オレはそんな風に思った。
以前はどことなく後ろ向きな感じだったのに最近は強くなることに対して貪欲になっているようだ。
今までは引け目を感じていたのか発言が少なかったのに、一手一手の意図について詳しく聞いてくるようになったり自分の意見を主張してくるようになったし、
かつて和谷が誘った時には「自分が行ったらレベルを下げてしまうから」という理由で断っていたという森下先生の研究会にも参加し始めた。
練習対局でもまだまだ筋は甘いけど面白い手を幾つも打ってくる。一度は本田さんがギリギリまで追い詰められたことさえあった。
一緒に昼食を取っている時、絶対に見返してやりたい相手が最近現れたと本人は語っていたので、その影響なのかもしれない。
そうした存在が人を大きく変えるのはオレ自身が何度も実感してきたことだった。
塔矢が佐為を追い、オレが塔矢を追っていたように……今オレと塔矢が競い合っているように……ライバルというものは人に大きな刺激を与えることがある。
思えば奈瀬は、オレが院生だった頃から時折自分より遥かに院生順位が高い相手に勝つこともあった。
ポテンシャルを開花させるきっかけさえあれば化けるような下地は既に持っていたのかもな。
目前にまで迫ったプロ試験も、今の奈瀬なら合格だって決して夢物語じゃないはずだ……。

「今日は珍しくこの時間でも店が混んでいる。だからボクの部屋に来てくれ」
何度目かの訪問の時にそう言われて桂木の部屋に初めて入ったけど、いかにもこいつらしい部屋だった。
台には各種ゲーム機がたくさん並んでいて、その上にはモニターが何台も並んでいる。
大量のモニターと向き合うようにゲーミングチェアが置いてあって、その周囲にゲーム機のコントローラーが幾つも設置されている。
……今日の仕事を終えた所で、オレは桂木に素朴な疑問を提示する。
「あのさ、これだと逆にゲームする時にゴチャゴチャしてて不便じゃねえの？」
「進藤、お前は何を言っている？同時に複数のゲームをプレイするに決まってるだろう」
「え？」
「リミッターを解除して落とし神モードを発動すれば、最大で６つのゲームを同時に操作出来る。ＡＤＶオンリーなら１２個までいけるぞ？」
「私そのシーンをうっかり覗いてしまったことがあります。神にーさまの動きがあまりに速すぎて、腕が６つに分裂したみたいに見えちゃいました！」
今、部屋に来たばかりのエルシィも合いの手を入れる。
……もうワケわかんねぇな。
桂木は本当に人間なのか？確かにこれならゲームの神を名乗るのも納得だぜ。
上手く言えないけど、ゲーム版佐為って感じの化け物だ。
オレもゲームは昔やっていたが、院生に入った頃くらいから家ですることは囲碁関係ばかりになってしまい、いつしか全くやらなくなってしまった。
だけど桂木と話している内に少しだけギャルゲーに興味が湧いてきた。何が桂木をそこまで熱狂させるんだろうか？

オレは何気無くこいつのＰＦＰの画面を覗いてみた。

未読メール　８２６通。
Ｔｉｔｌｅ「【らぶ♡ていあ～ず】のルート分岐について」
Ｔｉｔｌｅ「ワールド囲碁ネットのｏｔｏｓｉｇｏｄはもしかして落とし神様ですか？」
Ｔｉｔｌｅ「ブラックコーヒーはお好きでしょうか？」
Ｔｉｔｌｅ「失礼ですが神としての証は？」
Ｔｉｔｌｅ「初めて恋をした記憶」
Ｔｉｔｌｅ「羽鳥ゆうの攻略が分かりません。助言お願いします！」
……
……
…

「こら、勝手に覗き込むな。今は迷える子羊たちからの便りに目を通している所だ」
「あ、ごめん！でも桂木もネット碁やってたんだ？」
「打つ相手が多いに越したことはないからな。たまにプロと思われる歯応えあるプレイヤーもいるし」
「ｚｅｌｄａっていう奴がいるけど強いぞ？そいつもプロなんだ」
「ｚｅｌｄａ？まあ名前的にボクと同じくゲームを愛好する人間なんだろうし今度探してみるか」
　そして、どういうわけか桂木は「ふぅ～」と溜め息をつく。
「ネット碁をやってると自分がどんどん強くなってるのが分かる。前負けた相手にも再度挑んだら勝って、更にそいつとまたやってみれば更に大きな差を付けて勝つのがざらなんでな」
「おお！すげえじゃん！」
「なのに何でボクとお前の差はちっとも縮まらないんだろうな？」

恨めしげにこっちを見てくる。
オレと桂木は二度目からは、オレが三子置かせて打っている。最初に一局打ったのを機に実力差からして置き石はこの数が適切だと判断したからだ。
桂木は確かに凄い勢いで力を伸ばしていて、置き石の数を減らすべく奮戦している。
ただ、オレも負けず劣らず成長しているので中々そうはならない。それだけの話である。
「いつかお前にも『ありません』と言わせてやりたいものだ」
「楽しみに待ってるぜ！」
桂木がプロにならないのが本当に惜しい。
でもこいつには囲碁よりもっと大事な物があるんだから仕方無い。
……と、ここでふと浮かんできた疑問があるので本人にぶつけてみる。
「桂木ってギャルゲーやるのが三度の飯より好きなんだよな？」
「愚問だな。ボクにとってギャルゲーをするのは、好き嫌い以前に呼吸をするに等しい行為だ」
「それなら何で落とし神なんてサイトやってんの？自分だけがプレイしたんじゃダメなのか？」
あれだけギャルゲーをプレイするのが大好きな桂木が、時間を割いてまで攻略サイトを充実させようと力を注いでいるのがオレには不可解だった。
「そうだな……強いて言うなら、パイプとなるため…か」
「パイプとなるため？」
「ボクですら物心付くか付かないかといった幼い頃には、未熟過ぎて流石に独力でゲームの攻略法を全て見つけ出すことなど出来なかった」
やっぱ桂木にもそんな時期があったんだなぁ。でも桂木の幼い頃ってどんな感じだったんだろ？
まあ今と大して変わらない振る舞いをしていたであろうことはおおよそ察しが付く。

「そこでボクはネットでギャルゲーの攻略ノウハウを学び、ついでに自分が生まれる前に発売されていた作品のことも知った」
「そうした先人達の蓄積が今のボクの力の礎を築いている。ならば今度はボクが誰かの礎となろうと思った。それが、ボクが落とし神になったそもそもの発端かな」
　誰かは桂木に自らの蓄積を授け、桂木は他の誰かに自らの蓄積を授ける……。
「ボクの死後もギャルゲーは発売され、多くのプレイヤーが攻略に頭を悩ますことだろう。だが、落とし神からの蓄積を享受して成長した者達が道を切り開いてくれると信じている」

――遠い過去と遠い未来をつなげるため――

　瞬間、オレの脳裏にかつて自分自身が悔し涙と共に口にした言葉が過った。
　それは北斗杯の韓国チーム大将である高永夏（コヨンハ）に向けた言葉だった。
　お前は何故碁を打つのかとあいつに問われて。
　碁に対するオレの熱意、ギャルゲーに対する桂木の熱意。
　この二つは似ているのかもな……。
「ねえ桂木！良かったらギャルゲーを何か一本オレに貸してよ？ついでに本体もさ」
「それはダメだ！碁以外のことにはルーズ極まりないお前に貸したらどんな扱いをされるか分からん！どうせお前は菓子を手掴みで食べた手でコントローラーに触るタイプだろ！」
「ええ？いいじゃんか、このケチ～～!!」
　ちなみにエルシィはオレ達のやりとりなど素知らぬ顔で何故か消防車の本を読んでいるようだった……。

――翌々日――

「進藤！この前の若獅子戦では後れを取ったが今回はそうはいかない」

「へっ！今回もオレが勝たせてもらうぜ、塔矢！」

若獅子戦以来となるオレと塔矢の公式手合いが来た。

前回は公式戦で塔矢相手に初勝利を飾ったが、依然として塔矢は強敵だ。

中盤を過ぎてオレがやや劣勢。それでも勝機はまだある。

オレは塔矢の打ってくる手を読み、自らの選択肢を模索する。

塔矢からオレの予想通りの一手が出たその時…オレの理想通りのルートへと進めたその時…桂木がギャルゲーを楽しむ心理が更に分かった気がした。

もちろん決して塔矢はヒロインなんかじゃないけどな？

見えたぞ、エンディングが！

「……ありません」

「ありがとうございました」

敗北という名のバッドエンド……。

逆転されかけた塔矢は最後の最後になって長考した後、オレの予想を上回る一手を繰り出してきた。

正解の選択肢を選んだつもりでも、決して最後まで油断してはならないと改めて痛感したオレであった。

負けたのはとても悔しかったけど、それは水に流す。

検討を終えて一緒に帰る塔矢にオレは思い切って提案してみた。

「なあ塔矢、ちょっと話があるんだ」

「どうした進藤？そんな改まった顔をして」
「今度オレと一緒にギャルゲーやってみないか？」
「は？」
場を静寂が支配した。永遠とも思える長き時に渡って……。

ＦＬＡＧ０７．　広がる輪

ボクはあれからも時間を調節しては奈瀬と打っている。
ただ対局するだけではなく、主に自分と進藤の打った一局の中から選りすぐりの物をチョイスし、一部分を詰碁の問題として出題することもある。
イメージで言うと、コーチが練習メニューを組んでそれを選手がクリアしていく、というような感じか。
奈瀬は今まで院生一組の中堅でずっと足踏みしていたことが嘘のように、ボクに叩き込まれたことを次々とものにしていく。
その成長ぶりはボクをして、もし進藤に師事していなければすぐに追い付かれていたかもしれないと思うような躍進ぶりだった。
ボクは決して彼女に実力的に追い付かれるようなことがあってはならない。
奈瀬はそれまでの漠然とプロを目指していた囲碁人生とは打って変わって、明確にボクというライバルを得たことでかつてなく強いモチベーションをその胸中に宿している。
ボクは彼女の追うべき壁であり続けることで彼女に活力を与える。そうして人の負の感情をエネルギー源とする駆け魂の進化を抑制することが出来ると予想したのだ。
奈瀬の攻略は、駆け魂が入ったであろう時期からプロ試験終了までの約３ヶ月という前代未聞の長期的なスパンで行われる。その間に駆け魂が進化して、春日檜の時のように暴走してもらっては非常に困る。
攻略対象の好感度管理などボクにとっては朝飯前だが、流石に他の駆け魂持ちも並行して攻略しながら合間に奈瀬との時間を作るのは骨が折れた。
ゲームでは多重攻略がコンプリートのために必要とあらば、それが可能なようにイベント発生のタイミングなどが調整されているというのに現実（リアル）はつくづく不便だな。
そして、ボクは奈瀬のプライベートにも探りを入れる。そこで興味

深い話を本人から聞けた。
「周りの女の子達は彼氏がいたり、お洒落したり、遊んだり、あの仕事に就くだの大学に行くだの、目を輝かせてるのに私は何なんだろうなって」
そう笑いながら自虐する奈瀬。
語気こそ軽かったが、どこか泣きそうな雰囲気を感じた……。
やはり当初からボクが睨んでいた通り。
彼女の心のスキマの要因は、ただ自分が思うように強くなれないことだけではない。
長年に渡り囲碁に膨大な時間を費やしたことで、年頃の少女らしい青春を送れなかったことにも起因している。
……そうと分かれば次の攻略方針を定めることはそう難しくなかった。
要は自分が碁を頑張ったおかげで青春を勝ち取れたと思わせることが出来れば良いのだ。

「もういっそ店の中に囲碁専用のスペースを作っちゃおうかしら?」
ボクの母さんが冗談めかして呟いていたが、確かにそう言いたくなる気持ちも分からないではない。
今、ここカフェ・グランパでは3つの対局が同時に行われていた。

「あなたは一体何者です!?神の眷属たる私が二子置いてもなお一度も勝てぬとは……」
「何者って言われてもオレは単なるプロだし……オレより強い人なんてこの世にはたくさんいると思うんだけど……」
困惑したように頭を掻く進藤。
相対するのはボクの家の隣に最近引っ越してきた鮎川天理。いや正確に言うなら天理の体に憑依している女神ディアナだ。
女神とは、ざっくり言えば数百年前に駆け魂を封印した存在。

どうやら彼女は将棋に限らずボードゲーム全般で強いらしい。
それで天理がボクの家に遊びに来た時、ボクと進藤が店の一角で碁を打っているのを見て、彼がボクの指導を終えた後にディアナは軽い気持ちで進藤と対局した。
その結果、軽くあしらわれてしまったことに憤慨したのか、たとえ置き石ありでも進藤に負けを認めさせたいと何度もリベンジしているというわけだ。
「ボクなんか三子でも一度も勝てないんだぞ？」
横で打っているボクは愚痴る。
現在、進藤はボクとディアナの二人を同時に相手していた。二面打ちという奴である。
依頼料を払っているのはボクなのにディアナまでたまに一緒に打ってもらえているのは今一つ納得いかないが、ボクにとっても彼女と進藤の対局から学べることは非常に有益なので良しとしよう。
「桂木さん！あなたはさっきから甘い手を打ち過ぎです！我々が今この者に勝てるかどうかはあなたの手にもかかっているのですよ!?」
……なんでお前はボクと同じチームであるかのような物言いをしてるんだ。
榛原七香の前でもそうだったが、このディアナは人前で堂々と神を自称する。天理がそれでどういう目で見られるかも考えずに。
進藤が「なんであの人まで神だとか言ってんの？お前の仲間なのか？」とこっそり聞いてきたが、適当に誤魔化しておいた。
地獄と天界やユピテルの姉妹の話を進藤にするわけにはいかないしな。非科学的な設定にも程がある。卑近な喩えでいうなら幽霊の存在を信じろと言っているようなものだ。
しかしまあ、ゲーム世界の神であるボクが、現実（リアル）の神なんぞと一緒にされるのは実に心外だな……。

「うわぁまた負けたー！ハクアってば強すぎ！」
「エルシィ……ホントのホントにお前は次どう動くか読みやすいわね」

現在エルシィの相手をしているハクア・ド・ロット・ヘルミニウムは、エルシィと同じく駆け魂隊の一員である。
彼女は協力者（バディー）の雪枝さんから囲碁を教えてもらっており、たまに雪枝さんと打っていたらしい。
まあ覚えたて同士でもハクアがエルシィに連勝するのは自然な流れだな。たまにやらかすことはあっても基本的には要領のいい奴だし。
囲碁に興味を抱いたエルシィに基礎の基礎を教えたのは進藤だ。
エルシィが自分の黒石を取られまいと、既に置いてある石を横にずらすという暴挙に出たりしても「オレの幼馴染だって最初そうだったから大丈夫！」とフォローしていた進藤には頭が上がらない。
というかエルシィと同じことをするような存在がこの世にもう一人いるというのか？
そんなエルシィのエルシィぶりに呆れつつも、あいつが最近ボクに言ってきた言葉が妙に頭を離れない。
「神にーさまは駆け魂の攻略を通してどんどん友達が増えていきますね！」
……その場では他愛無い戯れ言と鼻で笑ったが、確かに心当たりはある。
学校で同じクラスの高原歩美や小阪ちひろとは、駆け魂を出した後でも憎まれ口を叩き合う関係となっており、テストで満点を取れるよう勉強を教えたこともあった。
今の所は、彼女達と積極的に仲良くしたいとまでは思わないまでも、一緒に過ごすことに関してどこか悪しからず思っているのも確かであった。
進藤とこうして碁を打っているのだってそうだ。
最初は目的のためのレベル上げという感覚でしか無かったはずなのに、いつの間にか奴との対局そのものを楽しむようになってしまっていた。

まあ頼まれてもギャルゲーを貸してやるつもりは絶対無いがな……。

まったく……このボクをこうも惑わせてくるなんて益々現実（リアル）は罪深いな。

認めたくはないが、ただ愚劣なだけの下らない世界だと思っていた現実（リアル）にも少しは価値を見出だせるようになった点だけは、あのバグ魔に感謝してもいいのかもしれない。

＊＊＊

プロ試験の予選がついに始まった。

私は三戦連続で中押し勝ちして、ストレートで本選へと進む。

こんなことは今までプロ試験を何度も受けてきた自分にとって初めてのことだった。

幸先の良いスタートに私は自信を強める。実力の向上によって得られた自信は、精神的な余裕へと繋がって私の心身に安定をもたらす。

そんな中、桂木から思わぬ連絡が来た。

ゲームにしか興味が無いはずのあの男が一体どういう風の吹き回しだろうか？

「予選で無敗だった御褒美だ。今度お前の好きな所に連れてってやる」

ＦＬＡＧ・０８　神の弱点

今私達の前に存在する『ガッカン・ランド』と看板に記された巨大ビル。
そこは繁華街のど真ん中に建つ一棟の建物が丸ごと総合レジャーランドになっている。
カラオケ、ボウリング、漫画喫茶、レストラン等々が全て一つのビルに入っている屋内型の大型アミューズメント施設だ。
驚くべきはなんとビルの側面からレールが突き出しており、ぐるっと一回転してまたビルの中に吸い込まれている点。
何人かを乗せたジェットコースターがビルの側面から勢い良く飛び出してきて、当然ぐるんと一回転してまたビルの中に消えていく。
不安感とワクワク感の両方が大いに刺激される光景だった。
一番の目玉は施設内ではコスプレして遊べる、という所にある。
受付で貸し出してもらえるコスチュームの種類は三百種類以上に及ぶ。
ナースや警察官などの制服から時代劇風の和装、各国の民族衣装、ゲームや漫画のキャラクターが着ている装束、果てには着ぐるみまで借りて遊ぶことが可能である。
「桂木、あんたがどっかに行こうだなんて一体どうしたのよ？」
こんな時でも相変わらずゲームに勤しんでいる彼に私は声をかける。
「言っただろ？お前が三連勝でプロ試験の予選を突破した御褒美だって。奈瀬が成長しててボクも嬉しいからさ」
ゲームから顔も上げずにそう言われても本音なのか甚だ疑わしかった。
しかし私が前から行ってみたいと思っていたこの場所に連れてきてくれたのは確か。しかも今日は全て桂木の奢りだという。
「じゃあ今日は遠慮無く楽しませてもらうわね」
「好きにしろ……くっ！幾ら無料とはいえこんなイベントはユーザーを舐めすぎだぞ！」

「……歩きながらゲームするのは危ないよ？」
「フンッ…お前はボクが歩きＰＦＰを会得して何年経つと思ってるんだ？」
「はぁ～……」
こんな可憐な美少女と二人で遊ぶっていうのにこいつは何なのよ……。
まあどうせ桂木のことだからゲームの女の子の方に夢中なんでしょうね。
隣に私がいるというのにずっとゲーム画面を見つめながら気味の悪い表情で耽溺している桂木。
そんな彼を見ている内、私の中で悪戯心が沸々と芽生えてきた。

「まずはここ行くわよ！」
そこはガッカン・ランドの七階のフロアほぼ全域を使っている名物スポット「水着で入るお化け屋敷」。
まず入場者は入り口で水着に着替える。水着は男女共に様々なタイプの物がレンタル可能となっている。
そして膝の辺りまで水に浸かった建物の中に入っていく。設定は〝水没した館〟というもの。
こんな具合に綺麗に水没する館が実際に存在するのだろうかとふと疑問に思ったけど、細かいことは気にしないでおこう。
お化け屋敷とプールが組み合わさっていると考えれば分かりやすい。入場者はその水没した館を水着で歩き回るというわけだ。
「うむ。いいだろう」
まんまと乗ったな？
七階に到着した私達は、左右に別れた男女それぞれの更衣室に入る。
着替えを終えた私は入り口前に向かう。桂木は既に所定の位置に着いていた。流石に水場だからかゲームは持っていない。
「じゃあ行くぞ」
……いや、そこで私の姿に対してはノーコメントなのか。

パレオを巻いたセパレーツタイプの水着を着用してきた私に対して、桂木は何の一言も無くずんずん進む。
あんまり気持ちの悪いコメントをされても困るのは確かだが、何とも言えない気分になった……。
生温い水に足を浸して、入り組んだ薄暗い迷路を歩いていく。
この水が単なる飾りかと思いきや予想外の恐怖を演出していた。
水の中で足場が突然ぬるぬるとしたり、急に血のような赤色が混じったり、水温が急激に下がったり。
更にバチャバチャと派手に水飛沫を立てながらお化けが飛び出してきた。
「きゃあっ！」
私は思わず桂木にしがみつく。
「…お、大袈裟だな。このくらいで」
桂木の声が微かに震えている。
暗くて表情がはっきり見えないので、それがオバケに驚いているせいなのか、私に強く抱き付かれて照れているせいなのか、どちらかはわからない。
いずれにせよ溜飲が少しだけ下がった。あの越智も真っ青な生意気坊やのこんな一面が見られるとは……。
ただ一つだけ気になることもあった。
お化け屋敷を出て元の服に着替え直した後に私は訊く。
「ねえ桂木、あんたもしかしてここに来たことない？」
「ん？」
滑らかな動きでゲームを操作していた桂木の指が一瞬ぴたっと止まり、視線も画面から僅かに逸れたのを私は見逃さなかった。
桂木は、私が話しかけた時に一々そんなゲームから意識を外すような反応を示す人間ではない。
「さっきの迷路をあんたは一切迷うこともなくスイスイ進んでたから」
進む道を間違えば行き止まりに当たるはずなのに一度もそうなることは無かったのだ。

幾ら桂木といえど、ヒントが全く無いあのお化け屋敷で正解のルートを選び続けることが出来るとは思えなかった。
「ああ、確かに来たことあるな。言い忘れてただけで別に隠していたわけじゃない」
「それは女の子と一緒？」
「そうだが、それがどうかしたか？」
「別にぃ～」
無性に腹が立ったが、私がどうこう言う筋合いには無いことも事実だった。
何より桂木が他の女の子と水着で遊んでいたことを自分が快く感じていないという本心を認めたくなかった。
桂木って顔は結構イケメンだし口は上手いし、ゲームにしか興味無いように見えて、本当は現実でも女の子を落としまくってるんじゃないの？
……そんな不埒な想像が私の脳内で繰り広げられる。

このモヤモヤした気持ちを発散したい。
そこで私が次に選んだのはカラオケだった。
「カラオケも点数を競うゲームだからな。格の差というものを見せてやろう」
「大した自信ね…」
こいつなら歌もそつなくこなしそうだなぁ。
だから、私は十八番の曲で勝負することにした。
～Ｇｅｔ　Ｏｖｅｒ～
――９３点。私としてはまあまあのスコアだ。
「その程度か。では次はボクも一曲いこう」
～Ｇｏｄ　ｏｎｌｙ　ｋｎｏｗｓ～
――４８点。いや、こんな低い点数をカラオケで私は見たことないんだけど！曲自体は素晴らしいのに……。
「何!?じゃあ違う曲だ！」
～ハッピークレセント～

――４４点。中川かのんちゃんの折角の名曲が……。
「何故だ……かのんがボクに半強制的に聞かせてきたこともある歌なのに！」
「え!?あのかのんちゃんと知り合いなの？」

……カラオケを経て、桂木は目に見えて落ち込んでいた。
最初はいい気味だと思っていた私も流石にこれはからかう気になれない。
自分が音痴なことに今までの人生でずっと気付いていなかった様子には流石に驚いたけど。
そんな時によく聞き覚えのある高い声が私の耳に飛び込んできた……。

「あれ？もしかして奈瀬と桂木!?何でお前らが一緒にいるんだよ？」

ＦＬＡＧ・０９　一歩前進

「進藤、あんたも来てたんだ！……桂木とは何かの知り合いなわけ？」
「えっと…最近オレが桂木の家に仕事で碁を教えに行ってるんだ。まあ元からプロになれそうなくらい強かったけどな」
「へぇー」
「奈瀬は桂木とはどんな知り合いなんだ？」
「ただ碁を打ってるだけよ。今日はたまたまここに来ただけ」
面倒なことになったな……。
かつて進藤が院生だった時期があるという情報から奈瀬と知人関係なのは想定していたが、こんな風に鉢合わせしてしまうとは。
別にボクの好感度が下がるようなことを進藤が口にするとは思わない。とはいえ、それでも攻略中に想定外のキャラクターと遭遇するのは、不測の事態が発生するフラグに繋がりやすいから避けたかった。
とりあえず話題を進藤サイドのことに集中させて適当に乗り切ろう。
……というか、目下こちらとしては何より気になることがあった。
「進藤、お前こそそちらの人とはどんな関係なんだ？」
まずボクは前振りとして進藤の隣にいる女子について質問する。
「あ、こいつはオレの幼馴染ね」
「藤崎あかりと言います！」
なるほど。
前に進藤が言っていたが、囲碁初心者の頃にエルシィ級のプレイングを披露した幼馴染というのはやはり彼女のことか。
さて、ここからが本題だ。ボクは本日最大の疑問を口にする。
「……二人のその格好は一体何なんだ？」
「いやぁ…手合い帰りにここ来たら、あかりがこういう格好したいって言うから仕方無くオレも合わせてさ」
「そう言うヒカルも割とノリノリじゃないのよ」
既にご存知かもしれないが、ここガッカン・ランドは様々なコスプ

レも楽しめる施設だ。
多種多様なコスチュームがレンタル可能となっている。
そして現在の二人の装いは完全に和を意識した物だった。
進藤の幼馴染とやらは巫女のような衣装を纏っている。
下は袴のようなスカートだ。ただし、丈は膝までしか無い。
個人的なゲーム上の好みで言うなら、申し訳無いが巫女風の装束での膝出しはどうにも邪道に感じてしまう。無論人気があるのは理解出来るが。
一方の進藤はというと、平安時代の公家のような狩衣に身を包んでいた。
頭には烏帽子を被り、手には扇子を握っている。
「この扇子は実は自前なんだぜ？」
そんな至極どうでもいい情報を聞き流しつつ、ボクは進藤の姿に対して妙にしっくりくるものを感じていた。
髪の色は一部派手なのに何故かそれが黒い烏帽子や純白の狩衣と絶妙に調和しているような気がする。
扇子を構える姿態も、普段の進藤からは考えられぬほど堂に入っていて貫禄がある。まるで何かが乗り移ったかのような威風だ。
「フンッ…馬子にも衣装だな」
「え、何？孫……？」
「……いや何でもない。気にするな」
まあこの辺で話を切り上げても不審には思われないだろう。
「ではボク達は向こうを回る。じゃあな」
「じゃあね、進藤と藤崎さん」
「奈瀬、桂木、またな！」
「これからもヒカルのことよろしくお願いします」
その後ボクと奈瀬は、ボウリングと屋内ジェットコースターを巡った。
この二つが苦手なボクと違って奈瀬は大いに楽しんでいる……ように見えた。

帰り道のこと、残暑に微かに忍び込む秋風を肌で感じる中。
しばらく口数が少なかった奈瀬が唐突に口を開く。
「なんか進藤ってさぁ…もう後一歩か二歩くらいで一流の棋士って感じだよね」
「ん？」
「それに比べて私って何なんだろ？未だに院生だし。進藤が院生の頃にはお姉さん面で接してたくせに」
「お前だってもうすぐプロになるんだろう？」
「そうだといいけどさ……」
……今の奈瀬に足りないのは自信だな。
「人を凄いと思うのも自分を情けないと思うのも、どっちも大概にしておけよ。ホントにそいつに一生勝てなくなるぞ？」
「ふふふ……あんたって私の友達の師匠と似たようなこと言うんだね」
「囲碁というゲームを攻略する上でボクが見出した持論を述べているまでだ」
別に囲碁に限ったことでもないかもしれないが。
「そっか。あんたは本当にハート強くて羨ましい。私もあんたみたいになれればいいのに」
「……」
「私って基本ネガティブだからさ、頭の中なんて過去の対局での後悔ばっかりよ。ああしとけば良かった、こうしとけば良かったって」
過去を振り返るのは大事だが、過去に囚われていては駄目ということだよな。
「私もあんたや進藤みたいにもっと前を向いていけたらいいのになぁ」
「現実（リアル）にもセーブやロードの機能があればやり直せるのに……と思うのはボクだってそうだ」
「ふーん」

「しかしそれ故に、発生する重要なイベントの数々は一期一会なんだ。……例えばボクとお前のやりとり全部とかな」
「え？」
「お前が悩み苦しみながらも碁を打ち続けてくれていたおかげでボクはお前と出会えた。勝手かもしれないが、そのことには凄く感謝してる」
「へ？……そう…なんだ」
「だからボクは今しばらくお前と共に歩もう。お前のシナリオの中で、これまでの苦渋を見事に挽回するような展開に辿り着くまで」
「なんかよく分かんないけど……ありがとう！」
大した励ましにならないかもしれないが、これで少しでも元気を出してもらえれば上々だ。
「あのさ桂馬？いきなりだけど、これからは私のこと明日美って呼んでもらうのはアリかな？」
「もちろんだよ、明日美」

プロ試験本選は目の前だ。
ボクはいつしか攻略とは関係無しに彼女の合格を願っていた……。

ＦＬＡＧ．１０　塔矢アキラは回顧する

「噂で聞いたんですが、今年のプロ試験は院生の女の子が一人べらぼうに強くて全勝合格もありえるとか」
「そりゃ豪気なもんだ。にしても進藤の奴は遅えなぁ…若先生に会わせたい相手がいるって言ってたくせに」

僕の父、塔矢行洋が経営する碁会所「囲碁サロン」で常連の広瀬さんと北島さんが言葉を交わしている。
北島さんは憎まれ口を叩きつつも、ここに進藤がいないと「何だよ、あいつは今日来ないのか……」と淋しげな表情を浮かべていたりするから微笑ましくなってしまう。
お互い忙しくなりつつあるからか最近は進藤と直接顔を合わす頻度が著しく減ってしまった。
僕が彼と最後に会ったのはこの前の手合いの時だ。
『今度オレと一緒にギャルゲーやってみないか?』
進藤が唐突にこんなことを言ってきたことを思い出す。
最初は全く意味が分からなかった。
……一体ギャルゲーとは何だ?ギャルが何か関係しているのか?
困惑する僕を前に進藤は苦笑いを浮かべたまま気まずそうにしていた。
結局僕はそのまま追及せずに他の話題へと転じたのだった。
彼は確かに見た目は派手だが、おおよそギャルとは縁の無い男だと思っていたのだが……。
そんな風に考え事をしていると、受付から市河さんのよく通る声が聞こえてきた。
「アキラくん、進藤くんがお友達連れて来たわよ!」
その声に僕は、先日の棋戦での一局を並べていた碁盤から顔を上げて、入り口の方に目を向ける。
こちらへと歩いてくる進藤の姿が見えた。後ろには眼鏡をかけた

少年を引き連れている。
その人の年頃は僕や進藤より少し上くらいだろうか？何やら歩きながらゲームをしているようだけど、ちゃんと前方に注意を払っているのか見ていて不安になる。
「ようっ！連れてきたぞ塔矢！」
「そちらの方は？」
「こいつは桂木って言うんだ！オレが仕事でこいつに碁を教えに行ってたんだけど、プロでもおかしくないほど強いんだぜ？」
「そうなのか。桂木さん、初めまして。塔矢アキラと申します」
「桂木桂馬だ。よろしく頼む」
桂木さんはちらりと僕に視線を向けるとまたゲームに集中し始めた。
「おい兄ちゃん！流石に初対面の相手と話す時くらいはゲーム止めたらどうだ？」
北島さんがたしなめるも桂木さんは構わずゲームを続けている。
「ボクは進藤の手で強引にここに連れてこられただけだ。まったく……今日は保存用のギャルゲーを買いに行く予定だったのに」
ギャルゲーだって!?
この人はギャルゲーが一体どんなものか知っているというのか？
ちょうどいい機会だし、ちょっと聞いてみよう。
「あの、すみません。ギャルゲーというのはどのような物なんでしょうか？」
刹那、桂木さんの目が変わった。まるでロボットの電源をオンにしたかのように。
この世の何者にも屈しないような力強い眼力を感じる。碁界の数々の実力者達との対局ですら感じたことの無い気迫だった。
……何か僕は気に障るようなことを言ってしまったのだろうか？
「ギャルゲーとは何たるかを君も知らないのか？」
「は、はい……なので教えて頂けたらと」
「いいだろう」

そして桂木さんはギャルゲーについて熱弁し始める……。
近くにいた北島さんや広瀬さんはいつの間にか遠くへと避難していた。
演説の中で彼は時折、格言のような言葉を口にするが、僕には何一つ理解出来ない。
ただ一つだけハッキリと思ったことがある。
……ギャルゲーと言う割にギャルは全然関係無いゲームなんだなと。

「まあ折角来たんだし一度対局してみたらいいじゃん。てか、今日はそのために桂木を引っ張って来たんだよ」
桂木さんの話がようやく一区切り付いた所で進藤が提案してきたので、僕も有り難く乗らせてもらうことする。
それに僕も進藤がわざわざ連れてきた桂木さんがどんな碁を打つのかは気になっていたのだ。
対局がスタートする。
進藤の提言により桂木さんの置き石は3つとなった。
黒になった桂木さんが一手目を打つ。
――その時、彼の姿が猛烈に進藤と重なった。
現在の進藤ではない。4年近く前、まだ出会って間もなかった頃の進藤だ。
その頃の進藤とそっくりの手付きで桂木さんは石を置く。それも右上スミ小目に……。
僕の思考は一瞬フリーズした。
だが、それをおくびにも出さず打ち続ける。進藤があそこまで言うのなら弱いはずがない。
三子置いているとはいえ今の僕を相手に桂木さんはほぼ対等に渡

り合う。この時点で並のプロ低段者達よりおそらく上だ。
この対局に限って言えば、僕の敗北の可能性すら絶無とは言えないほどのレベルだった。
「…ありません」
ここで桂木さんが投了。終局まで読む限り、僕が辛うじて半目勝っている。
「やっぱり塔矢が勝ったかぁ。まあオレも桂木にはいつも勝ってるからな！」
「お前はこの前に一回ボクに負けたろ」
「うるせえやい！その後はまた勝ち続けてるじゃねーか！」
二人の喧騒を尻目に僕は再び進藤と出会った頃のことを思い出していた。
当時進藤は、碁石の持ち方は全くの初心者なのに桁外れの力を持っており、本因坊秀策を想起させる手を打ってきた。秀策のコスミがその最たる例だ。
桂木さんと対局していると過去の進藤とのことを否応無く思い出してしまう。もちろんかつての進藤の強さは、桂木さんをも遥かに凌ぐ程ではあったが。
「桂木さん、貴方はこんなに強いのにプロにはならないんですか？」
そこも気になった。
「ボク自身がプロになることには興味無いね。ボクにはギャルゲーがある。おそらく君の囲碁への情熱に負けないくらいボクもギャルゲーを愛している」
「そうですか……」
少々残念だが、他にもっと優先すべき大切な物があるのなら仕方が無い。
僕には限りなく囲碁を愛する才能があると幼き日に父から言ってもらえたことがあるけれど、桂木さんにとってはそのギャルゲーこそが限りない愛を捧ぐ対象なのだろう。
「ならたまにここに来て打ったりはしませんか？」
「そうだな……近くにギャルゲーの品揃えがいい店があるし、稀に気

が向いたら少しだけ寄るかもしれん」
「本当ですか？嬉しいです」
良かった。彼とはいずれまた打ってみたい。
どうやら桂木さんはもう帰るようだ。
そして再び取り出したゲームに目線を落とした彼が、去り際に独り言のように一言呟いたのを僕は聞き逃さなかった。
「もし進藤の記憶まで消されなければの話だがな……」

ＦＬＡＧ・１１　理想の世界の住人

放課後を迎えた舞島学園高校。
土砂降りの雨が執拗に教室の窓を叩く。
……これはゲームを買った時には、念のためにパッケージをビニール袋で入念に包んでもらった方がいいな。
担任の二階堂が次回の自分の授業で小テストを行う旨を告げる。
生徒達は悲嘆に満ちた呻き声を上げつつ帰り支度をしていた。
「桂木！この前あの塔矢アキラくんに会ったって本当？」
「それにあんた進藤ヒカルくんとは何度も会ってるんだよね？」
「ん？何でお前らがそのことを知ってるんだ？」
本日発売の新作を買いに行くため逸早く帰ろうとしていたボクに話しかけてきたのは歩美とちひろだった。
そもそもこいつらが囲碁のプロのことを知っていようとは。
「エリーからさっき聞いてさ」
あのバグ魔め…面倒な連中に余計なことを教えたな。
「確かに会ったけどそれが何だよ？」
「サインとかはもらわなかったの？」
「サインだと？」
何であいつらのサインなんか……。
「だって塔矢くんってあの歳で囲碁がすごく強いって今有名なんだよ？んで進藤くんはそんな塔矢くんと渡り合えるライバルだってさ！」
「それでいて二人共イケメンなんだもんなー」
なるほど、そういうミーハーな目線ね。
特に人一倍イケメンに目が無いちひろが食い付くのは納得だ。校内イケメン情報なんて収集してたくらいだしな。
今も頬に手を当てて恍惚とした表情を浮かべている。
「別にただ碁を打ってただけだよ」
「え？桂木あんた囲碁わかるの？」
「愚問だな。ボクはゲーム世界の神だぞ？囲碁だってゲームだからな」

まったくアホらしい……。最新作がボクを待っているんだ。もう帰らせてもらおう。
「お前らはさっさとバンドの練習でも行ってきたらどうだ？」
「言われなくても行くわよ！歩美は今日どうする？」
「雨で陸上部が休みだし、そっち行くつもり！」
忙しなく歩き出した二人の背を見送り、ボクはため息を吐く。
そういえば、あいつらが軽音楽部の設立を申請出来るように力を貸したんだったな。
英語の期末テストで満点を取れという条件を突き付けられたらしく、ボクが1時間だけ勉強を教えたんだ。
駆け魂の攻略とは一切関係無い。でも「不安な時にはいつでも助けてやる」と以前攻略中に約束してしまった以上、たとえ地獄の手で記憶を消されていようとボクはそれを反故には出来なかった。
……明日美のプロ試験合格に攻略の枠を超えてまで肩入れしてしまっていることといい、近頃のボクはどうにも現実（リアル）に絆され過ぎているな。

ゲームと現実（リアル）……無論この両者は全くの別物だ。
ゲームとは製作陣が「プレイヤーにこのように楽しんで欲しい」という理想を込めて作った世界。
そのような計算された美しい世界をボクは自らの翼で翔け抜けてきた。
それが至高の生き方だと思っていたのだ。
一方、現実（リアル）なんて美しさの欠片も無い不合理の塊だ。
セーブ機能もロード機能も無ければ、コンティニューすら容易には出来ない。致命的なバグだって星の数ほど存在する。その癖、残機はストック無し。
それなのにボクが攻略してきた娘達は明日美を含め、皆何かしらの理想を目指して現実（リアル）の泥沼を一歩一歩手探りで進んでいる。時には地を這いつくばってでも……。
そうやって泥臭く生きる彼女らの姿を見て、いつしかボクは放って

おけなくなってしまっていたようだ。……ある意味では彼女らも理想に生きる者達だからだろうか？
「あーあ、まったくボクとしたことが……」
今日二度目のため息を漏らしつつ、ボクはネットでプロ試験本選２４日目の結果を確認することにした。
早ければ今日で明日美の運命は決することとなる。ボクと彼女の関係に刻一刻とタイムリミットが迫ろうとしている。
ＰＦＰでネットを立ち上げる間、窓の外にちらりと目をやれば、雨はいつの間にか小降りになっていた。
だが、まだまだ止みそうにはない……。

＊＊＊

「本日を以て君の合格は確定した。おめでとう奈瀬くん」
プロ試験最終日である２７日目を待たずして無事に私の合格が決まった。
受験者全員での総当たり戦を行うプロ試験本選。無敗のまま突き進んで勝利数一位であり続けた私に続くのは、三敗のフクと四敗の小宮である。
仮に私が残った試験日に全て敗北したとしても三敗止まりであるため、私が一位であることは揺るぎない。よって、この時点で合格枠となる上位三名の内の一人は私で決まりだ。
「はい。ありがとうございます」
院生師範の祝福の言葉に私は淡々と応える。
人生を懸けた積年の夢がようやく実を結んだ瞬間だった。
私の今までの人生において最もめでたい日なのは間違いない。
なのにどうしてだろう？
全てが上手くいったはずなのに何故私は今こんなに胸が苦しいのだろうか？

もう緊張感から解放されたはずなのに何故私は今こんなに足元が覚束ないのだろうか？
ねえ、教えてよ桂馬……。
「奈瀬くん？試験疲れでちょっと体調があまり良くないんじゃないかな？」
院生師範が心配そうに問いかけてくる。
「いえいえ！私は普通に元気ですし、合格出来て何より嬉しいです！」
私は声を張り上げて作り笑顔で返答した。
……そもそも何で私は今、作り笑いなんか浮かべてるの？
こんなはずじゃない。心から笑うべき場面なのに。
私の中のどこかで鳴り響く警鐘はいつまでも止まることは無かった。

ＦＬＡＧ・１２　Ｄａｙｓ

黄色く染まったイチョウの葉が、風に煽られてひらひらと舞っていった。
棋院の入り口から伸びる道の両脇に佇む並木は、紅や橙に色付き始めてすっかり秋の装いだ。

プロ試験本選２５日目、私に初の黒星が付いてしまった……。
自分でも酷い碁だったと思う。攻守共に精彩を欠いた手が多かった。
昨日、プロ試験の合格が確定したにも関わらず言い知れぬ不安感に襲われた私は、震える手で桂馬に連絡を取った。
彼は私の合格を賞賛してくれた。無論それ自体はとても嬉しい。
でも肝心なことは聞きそびれた。より正確に言うなら、怖くて聞けなかったというべきだろうか。
もし想定していた通りの答えが桂馬の口から返ってきたなら、自分がどれほど酷く傷付くか計り知れないからだ。
要するに私は彼の本心に触れることから逃避したのだ。それが単なる先延ばし以外の何者でもない行為だと理解していながら。
不治の病に冒されている患者が医師に余命を問うことを恐れるかのように……。

プロ試験本選２６日目、今日も負けた。相手はフク。
「ねえ奈瀬さん、前回と今日はどうしちゃったのー？」
普段は無邪気なフクが心配げな顔で尋ねてくる。
私は笑って誤魔化す。
「あはは……合格が決まって気が抜けちゃったのかも！私ったらまだまだ甘いなぁ」
しかしフクは納得行かないような表情をしている。
「奈瀬さん…碁を打つ時はね、しっかり碁盤を見なきゃダメなんだよ？今の奈瀬さんはちゃんと盤面を見てるようで見てないもん」

「そんなこと……」
否定しようにも後ろめたさが先行して言葉が続かない。
「こんな奈瀬さんと打ってても全然楽しくないよー！」
苦い顔付きのままフクは立ち去って行った。
「ごめん…」
私は座ったままその小さな背中を見送ることしか出来なかった……。
俯いて独り悔悟する。本当に私は一体何をしているんだろう。

心ここにあらず。
そんな心境のまま試験場から出た私に声をかけてくる人がいた。
「やあ、明日美」
おそらく直接会うのは約1週間ぶり。
……今私が誰よりも会いたくて、でも誰よりも会うのが怖い相手だった。
「桂馬！」
一瞬の躊躇はあったものの私はすぐに駆け寄る。
「こんな所でどうしたのよ？」
「結果を見たぞ。お前、前回だけでなく今日も負けたんだってな」
私が一番触れて欲しくないことに彼は言及してきた。
「それが合格確定しちゃったら気が抜けちゃってさ。面目無い限りです！」
フクに伝えたのと同じ言い訳を口にする。
自分の心にすら嘘を吐きながら……。
「そうか」
桂馬は私の返答をあっさりと受け入れたように見えた。
ほっと胸を撫で下ろす。ところが……
「なあ明日美、今からボクの家に来ないか？」
「え？」

「母さんが家で喫茶店をやっているというのは前に話したよな？今日は店が休みだから、そこで明日美の合格祝いがしたい」
思いも寄らぬ提案だった。
「でもそこまでしてもらうのはちょっと悪いし……」
「ストレートに言わせてもらうならば、ボクの方からどうしても話したいことがあるんだ。だから頼む」
「……わかったわ」
とりあえず行ってみるとしよう。
桂馬の家の喫茶店というのがどんな感じかも気になるし。
私達は電車に乗って舞島市へと向かう。途中、桂馬が黙々とゲームをしていて何も話さなくて良かったのが今の私にとっては非常に有難かった。

「へえ～、お洒落なお店じゃない！」
店の裏口から中に入れてもらった私は、内部をざっと見渡す。
「まあ母さんはインテリアに結構こだわってるらしいからな。ボクにはよくわかんないけど」
言われてみると、確かに店内に置かれている調度品の数々はどれもセンスの感じられる品だった。
自らの存在を主張し過ぎることも無く、自然に店に馴染んでいる。
「母さんが出かけてるから大した物は出せないけど、コーヒーならボクでも淹れられる。ちょっと待っててくれ」
そう言って桂馬は店の奥へと姿を消した。私は大人しくテーブル席に座って待つことにする。
店の隅にちらりと目を向けると意外な物が置いてあった。……碁盤だ。マグネット式の碁盤が棚に仕舞い込まれている。
「ほら、熱々だから気を付けろよ？」
桂馬の持つコーヒーからは湯気がほかほかと立ち昇っていた。ほろ苦く、ほろ甘い香りが私の鼻腔をくすぐる。
コーヒーを受け取りつつ私は疑問を露にする。
「ねえ、何で碁盤が店の中にあるの？」

「ああ、あれは元々は進藤が持ってきた物なんだ」
「進藤の？」
「ボクはついこの前まで進藤から囲碁について教わってたからな。一回目の時にあいつが持ってきていたマグネット碁盤をそのままもらったんだよ」
「あんたのとこには碁盤が無かったわけね？」
「そうだ。碁はゲームで打てるからな」
「はあ～あんたらしい考えね」
　私は進藤に同情した。
　まあ進藤のことだから桂馬ともすぐに打ち解けてしまったのだろうけど。
　というか、やたら負けず嫌いな所は似た者同士で案外いいコンビだったり？
　桂馬が私をここに呼びつけて、しようとしている話……それを聞くのが怖くて何か適当な会話を続けようとするも話題が何も思い付かない。
　そうこうしている内にその時は来てしまった。

「明日美…ボクが伝えたいことは一つだ」
「何？」
「もうボク達の関係は終わりにしよう」
「……」
　やっぱりこう来たか。
　前々から薄々察していたことだ。私がプロ試験に合格したらこんなことになるんじゃないかということなんて。
「……何でよ？」
「ボクはもう碁を打たないからだ」
「打たない？」
「ああ、元来ボクは碁打ちではなくギャルゲーマー。ボクの本来の使命はゲームのヒロイン達を攻略することにある」
　は？

「ふざけないでよ…ふざけんじゃないわよ！そんなことのために!!!」
「そんなこと……か。お前は自分が碁を打つことをそんなこと呼ばわりされたらどう感じる？」
確かにそれは怒るだろう。
私は黙り込む。それでも到底納得は出来なかった。
「だからって……私とたまに打つことすらダメなの？ホントのホントに『たまに』でいいんだよ？」
「ダメだ！」
桂馬はいつになく強い口調だった。
「ボク自身はもう今よりも強くなることはない。だから明日美はすぐにボクなんか追い越してしまうだろうな」
「私なんかまだまだよ。そもそも一体そのことが何の関係があるわけ？」
「関係大有りだ。ボクと出会ってからの明日美はただひたすらボクに追い付くことだけを目標に必死に頑張ってきたわけだよな？」
「……まあそれが一番になりつつあったのは否定しないわ。もちろんプロ試験に受かりたいっていう想いもあったけど」
「そうなるとお前がボクに対局で勝つようになればモチベーションの大部分は失われてしまうだろう。そしたら、またお前は碁への向上心を失くすかもしれない」
「どうして？打倒塔矢アキラとか言ってた進藤だって、塔矢に手合いで勝ったことのある今でも情熱的に強さを追い求めてるのよ？」
塔矢に勝ちたいという、あの飽くなき欲求が進藤の強さの源の一つになっているのは間違いない。
「塔矢は棋士だ。それも生粋のな。だからどこまでも強くなり続け、進藤が並んだ今でも互いに競い合って互いに打ち勝たんと切磋琢磨を続けている」
「うん」
「だが、ボクは棋士じゃない。ボクはお前に負けるようになったからといって、今のあいつらのようにお前と対等なライバルとして在り続けるわけにはいかない」

「それならこれからも桂馬がネットで色んな相手と碁を打ったり、進藤に教わったりして強くなれば……」
「ボクにこれからも囲碁をたくさんやれということか？」
私は口を噤んだ。
桂馬には桂馬の人生がある。なのにそこまでさせるわけにはいかない。
でも……でも……
「私は桂馬に会いたい……とにかくこれからも会いたいんだよ……！」
いつの間にか自分の声は涙交じりのものになっていた。
桂馬の前で泣くのは二度目だ。私って意外に泣き虫だったんだなぁ。
涙で目の前が霞む。それでもなお彼の真剣な面持ちははっきりと見えた。
「まずはコーヒーを飲んで落ち着け。このままじゃ冷めるぞ？」
渋々ではあるが、言われた通りにコーヒーを一口啜った。
繊細な風味で、爽やかな酸味のアクセントが効いている。
体が芯からじんわりと温まってくるような気がした。
「なあ？今からあれで一局打とう」
桂馬が指差したのは先程のマグネット碁盤だった。
私は頷く。正直彼に言いたいことはまだまだ沢山ある。しかし、何にせよ彼と会うのが今日で最後かもしれないのなら打たなければ……。

「……お願いします」
「お願いします」
私と桂馬は黒石と白石、点と点を結び、戦いの流れを幾重にも読み合う。
対局は終盤に入るまで互角の形勢のまま進んだ。
そんな中、私は一つとても気になることがあった。
「あんた今日はゲームしながら打たないんだ？最後だから私に気を

遣ってるってわけ？」
「違うな。もはやお前は今のボクにとってゲームをしながら戦えるようなレベルの相手ではないというだけだ。認めるのは癪だがな」
嬉しいコメントをもらう。
とはいえ、盤面は私にとって急速に不利になりつつあった。
それでも桂馬に勝ちたい……。そんな自分の心に正直に私の打てる限りの手を打つ。
遠くに見える勝ち星を掴み取るために怒涛の勢いで追い上げていく。
たとえ桂馬が私の前からいなくなってしまうとしても、彼との思い出はこれからも私の碁の中にある。
私は自分自身を囲碁のことしか好きになれない女の子だと思っていた。けれど貴方に出会って私は恋というものを知った。
貴方が今愛しているのがゲームのヒロインだけだったとしても、私が貴方のヒロインになれなかったとしても、貴方は私のヒーローだ。
会えなくなるのなら、せめて私の碁をその目に焼き付けて忘れないでいて欲しい。
斯くして終局を迎えた。
「ありません……」
「……ありがとうございました」
結果として４目半差での私の敗北。
奇しくも棋院で初めて出会って対局した時と同じだった。
「あらら、負けちゃった。今度こそ勝てるかもと思ったんだけどねぇ……」
「一歩間違えば負けてたのはボクだったかもしれないな」
桂馬は温かく微笑む。
打ち終わった途端、再び私の目から涙が溢れてきた。
とはいっても先程の涙とはまた別種の感情が込められたものだった……。
「そこで流すのが悔し涙なら、やっぱりお前はまだまだ今の何倍も強くなるよ。ボクなんかに勝ったくらいで満足していい器じゃない」

「……」
「お前も囲碁というゲームを極めんとするゲーマー、即ち棋士ならばより高みを目指すんだ。進藤や塔矢にも負けないくらいにな。そして最高のエンディングを見付け出せ！」
「……うん！」
私は残っていたコーヒーを再度口に運ぶ。すっかり冷めたコーヒーは苦味を増していた。
何故だろうか？今の私にはそれが絶妙に心地好かった。
「あのさ……」
「何だい？」
「最後のお願い。私の気持ち受け取ってくれる？」
私は桂馬と共に椅子から立ち上がった。
更に彼の頬に手を添えて顔を近付ける。拒む様子は見られない。
そのまま初めての口付けを交わした……。
ただ触れるだけの不器用なキス。それでも互いの唇の柔らかさを実感するのには十分だった。
頬に当てた手が汗ばむと共に唇の温度まで上がっていく気がした。
そっと顔を離し、心からの一言を告げる。
「今までありがとう、桂馬――――」

＊＊＊

明日美の身体から異形の霊体が噴き上がってきた。
心のスキマが無くなった宿主から逃げ出そうとする駆け魂だ。
「エルシィ、頼むぞ！」
「はい！神にーさま！」

現場に素早く臨場したエルシィは、姿を現して飛び立とうとする駆け魂を大きなビンで捕らえる。
「駆け魂勾留!!」
駆け魂は勾留ビンの中でぐったりとしている。
「よくやった！では次に明日美を彼女の家まで送り届けてくれ。場所は分かってるんだったな？」
「もちろんです！お任せください！」
胸を張るエルシィに明日美を託した。
エルシィは、安堵の表情で眠る明日美を抱えて姿を隠しつつ、すっかり暗くなった空へ飛んで行った。
「終わったな……」
ボクは力無く椅子に座り込んでＰＦＰの電源を点ける。
「何よ？もし駆け魂が成長してたらエルシィ一人じゃ押さえ切れないからって私を呼んだくせに出番無し？」
「攻略にこんな長期間を費やしたことは未だかつて無かったからイレギュラーなんて幾らでも想定出来る。地区長様の力を信頼してのことだ」
「こんな時だけ煽てられてもね」
ボクの要請に応じて待機していたハクアだ。
むくれつつも大事に至ることが無くてほっとしているようだ。
そんな彼女が皮肉げに口を開く。
「でもまあ桂木…あんたってホントに女の敵よねぇ？」
「何？」
「今までああやって何人の女の子に甘ったるい台詞吐いてはサヨナラしてきたわけ？」
「フンッ…さあな。しかもこれからは女神を探さなければならないとなると、修羅場の一つや二つは潜り抜ける羽目になるだろうな」
「……まああんたの立場が大変なのには同情するわ」
ボクだって早くこんなことの繰り返しからは解放されたいさ。
このままではボクは、また現実（リアル）に肩入れし過ぎてしまうかもしれない……。

「ところで明日美はともかく進藤達の記憶や記録はどうなるんだ？」
「進藤があんたに囲碁教えたり、友達の所に連れてったりした部分は消されないでしょうね。でも、あんたが奈瀬って子といる所に出くわしたのに関しては消されるはず」
「意外だな。てっきり何から何まで消されるかと思っていたが」
「あんたが進藤から指導受けてたのをあんたのお母さんやここの常連客が何度も見てるし、エルシィが学校のクラスメート達にも話してるからね。全部消しちゃうとかえって何か問題が起きかねないじゃない？」
「ふーん。……ならまあいつか気まぐれであの碁会所に行ってやってもいいかもな」
　ま、あそこで打つとしても近くの店で買ったギャルゲーをプレイしながらにはなるだろうけどな。どちらにせよ当分先の話だ。

　ボクは嘆息しつつ碁盤に目を向ける。
　明日美の記憶が失われた今となっては自分だけがこの一局の全てを知っている。
　ボクと彼女を繋ぐ碁……それは決して忘れてはならない。そうボクは心に誓ったのだった。

ＦＩＮＡＬ　ＦＬＡＧ　両ケイマ逃すべからず

――翌年の春――

新入段の免状授与式が執り行われる中、私は自分が合格したプロ試験での出来事に思いを馳せていた……。

試験本選の２４日目で合格を決めた後、２５日目と２６日目では不調に陥って敗北を喫した私だったが、最終日である２７日目で無事に調子を取り戻して快勝を収めた。

ちなみに２６日目で負けた後には、私はどういうわけか自宅の玄関前に横たわっている状態で母に発見されたという。インターホンが鳴って母が出てみれば、そこには他に誰もいなくて私だけが倒れていたのだそうだ。

両親に質問責めされたが、何故そのような事態になったのか私には全く身に覚えが無い。

プロ試験終了後は、和谷のアパートの部屋でささやかな祝勝会を開いてもらった。同じ年に合格したフクと小宮も一緒である。

私がようやく合格を手にしたのは、進藤を始めとするいつものメンバー達が特訓に付き合ってくれたおかげだ。感謝してもしきれない。

だから試験後は、彼らを含むお世話になった人達にお礼を伝えて回った。

ちゃんと関係者全員に感謝の意を伝えたはず。

……なのに何故だろうか？誰か抜かりがある気がする。

頭の中で幾ら考えても連絡先を幾ら確認しても、心当たりなど一つも無かった。

――ただ碁を打っている時、ふと誰かの温かくてしなやかな手が自分の指先と重なるような……そんな心地良い錯覚を抱くことが度々あった。

私の碁の中にいるその人が見守ってくれる。そう思うと自然に力

が湧いてくるような気がした。

「奈瀬！良かったら今度オレと一緒に塔矢の碁会所に行ってみないか？」

用事を終えて帰路に着こうとしていた私に進藤が声をかけてきた。

彼は最多勝利賞を受賞していたため今日は同じ会場に来ていたのだ。

勝率第一位賞を受賞した塔矢アキラとは先程元気に喧嘩していたようだったが、周囲は苦笑いを浮かべながら眺めるだけで、誰も大して気にも留めていない。

「いいけど何で私を誘うのよ？」

「それがあの碁会所で受付やってる人が奈瀬のこと可愛いって言うからさ、一回会ってみたいんだってよ」

「そうなの……」

まあ悪い気はしないし、一度行ってみるか。

「そういえばあんたとは多分今度の北斗杯の予選で当たることになるわよね？」

「いや、それが今年はオレもシード枠なんだ」

昨年の予選は塔矢だけがシードとして扱われていたけど、今年は進藤もなのか。

まあ進藤はプロ二年目だと強豪棋士にも勝ちまくって三大リーグ入りまで果たしていたし、塔矢にすら時折勝つんだから妥当と言えば妥当かもしれない。

そうなると三人目の選手の枠を懸けた戦いで一番の壁になるのは、やはり関西棋院の社くんだろうか？彼は去年に選手入りしているし。

越智や和谷だって壁になり得る。同期のフクや小宮も決して弱くは無い。私より一つ歳上の本田くんは、今回はもう年齢的に参加資格が無いのが救いか。

油断ならない相手ばかりだというのに…いや油断ならない相手ば

かりだからこそ武者震いしてしまう。
「じゃあ、あんたと一緒に北斗杯に出られるように頑張るわね」
「ああ、楽しみに待ってるよ！じゃあな！」
進藤は北斗杯に対して並々ならぬ熱意を抱いている。
前回、高永夏に後一歩の所で敗れたのがよほど悔しかったらしい。
進藤は私と別れた後、また塔矢と合流しているようだ。さっきまではあんなに激しく火花を散らせていたのに。
……私もあの二人に負けていられないな。
帰り道には満開の桜が連なり、そよ風に撫でられて優しく揺らいでいた。

「あなたが奈瀬明日美ちゃん？週刊碁で写真を見た時から可愛いと思ってたけど、実際に会ってみたらまるで天使みたいね！」
「あはは……ありがとうございます」
進藤に紹介された碁会所「囲碁サロン」にて。
受付の市河さんは２０代半ばくらいの女性だった。
碁会所だというので、てっきりおじさんかと思っていたから意外だ。
でも同性のファンというのも中々嬉しい。
「いっちゃん、自分が呼んだ可愛い女の子に若先生を取られないようにしなよ？」
「もう！私はアキラくんのことはあくまでお姉さんとして見守ってるだけだから！」
頬を紅潮させつつ、からかってくる男性客に憤慨する市河さん。
彼女は塔矢アキラとは一体どういう間柄なんだろう？
まあいずれにせよ塔矢のことはあくまで棋士としてしか興味の無い私には関係のないことである。
「奈瀬、奥の方が空いてるからあっち行こうぜ！」

進藤に連れられて向かった先では私達と同年代の少年が他の客と打っていた。
その少年は眼鏡をかけており、対局中だというのに携帯ゲーム機で遊んでいる。
それでいて戦況は明らかに少年の方に分があった。しかも相手の客がしばらく考えて放った手に対して、ノータイムで鋭い反撃を返している。
碁石の持ち方からして初心者にしか見えないのにその一手一手はプロの私をも唸らせる物だった。
程無くして対局相手は力無く投了した。
「ここ来るのほとんど半年ぶりだってのに相変わらず強いな、桂木は」
「そんなことは無いさ。さっき塔矢がいたから三子置いて打ったんだが、前回来た時と違ってボコボコに……」

……そこで私と目が合った途端、彼は何も言わなくなった。

「あの、どうしました？」
私がどうかしたのかな？
「あ、いや…知り合いとよく似てたから勘違いしただけだ」
「まあ桂木は奈瀬とは会ったことがないはずだしな」
確かに私はこの人とは初対面のはず。
それなのにゲームをしながら人を碁で翻弄するような図太い姿には何故か既視感があった。
そして、私はある一つの衝動に駆られる。
「もし良かったら今から私と一局打ってみませんか？」
「え？」
「お、それいいじゃん！言っとくけど桂木はプロ並に強いぜ？奈瀬」
「なら互先でいいですね？」
「……ああ、構わない」
この人とはどうしても打たなければならない……そんな気がしたのだ。

桂木さんが黒で、私が白となった。
「お願いします」
「……お願いします」
彼の第一着は右上スミ小目。
私は迷わず左下の星に一手目を打った。……さながら予め定められていたことかのように。
桂木さんはもうゲームをしていない。その目は真剣そのものだった。
今の自分の相手がプロだということを把握しているのだろうか？
もしかしてこの人は私という人間のことを知っている……？
確かに彼はアマチュアとは思えないほど強かった。プロでないのが驚きだ。
それでも今の私なら勝てない相手ではない。
桂木さんの見せた僅かな綻びを突く一撃を叩き込む。

「……ありません」
「ありがとうございました」
桂木さんは投了した……。
このまま互いに打ち切れば７目半の差で私が勝つだろうという所で。

「桂木さん凄く強くてビックリしちゃいました！そういえば、まだ名乗ってませんでしたよね？私の名前は……」
「奈瀬明日美……だろ？」
「え!?知ってたの？」
「ああ、今年プロになった内の一人じゃなかったか？何かで見た記憶がある」
「……そうそう！その通り！知ってもらえてて嬉しいな」
何だ……プロになった人間の情報をたまたまどこかで見聞きしていたというだけか。
「桂木、次はオレと打つぞ！置き石は……４つでいいか？」

「舐めるな。3つで十分だ」
桂木さんは次は進藤と対局するようだ。その前に一つだけ私は聞いておきたいことがあった。
「ねえ、桂木っていうのは名字だよね？下の名前も教えてもらえない？」
「何でそんなことを？」
「いいから！」
「……桂馬だ。桂木桂馬」

――桂木桂馬――

不思議と馴染みのある名前だ。
「桂木くん……いや桂馬くん？もしかして私とどこかで会ったこととかない？」
「さあ？ボクは覚えてないけど、どこかで一局打ったりしたのかもな」
一局どころじゃないはずよ！……という言葉が喉まで出かかったが、何とか呑み込んだ。
もし何度も打っているのなら、覚えていないはずが無いからだ。
ならば……
「じゃあこれからはいっぱい打とうよ！」
いきなり何を提案しているのかと我ながら思う。
けれど碁も人生も終局を迎えるまでの全てが大切な通過点。未来というのは今の延長だ。
だからこそ今を大切に……悔いのないようにしたい。
「……お前はもうボクより強いじゃないか」
「でも桂馬と打つのメチャクチャ楽しいんだもん！それが一番大事なことだよ！……囲碁は楽しむために打つものだから」
「そうか。確かにそういう考え方もあるな。……まったくボクとしたことが」
ここで初めて彼は笑顔を見せた。

「よろしく明日美」

温かくて……懐かしい笑顔だった。

FLAG・EX1　第二回北斗杯（前編）

〝日本棋院所属のプロ棋士である御器曽（ごきそ）容疑者は、江戸時代末期の棋士として知られる本因坊秀策の直筆と偽った署名入りの碁盤を売らせていたと関係者は証言しており、現在は詐欺の疑いで警察による取り調べが進められています〟

本因坊秀策が愛用していた碁盤であると客を騙し、高値で売り付ける詐欺師か……。

進藤がもしこいつと対局したら怒りのあまり碁の中でボコボコにしそうだな。

そんな益体も無いことを考えながら、ボクはニュース番組をぼんやりと眺める。

本来であれば、テレビを見るくらいならゲームの一つや二つや三つでもプレイするのだが、生憎ながら今は夕食の最中だ。

食事中にまでゲームをやると母さんに厳しく叱られるからテレビを見るしかない。

「にーさま！なんかこの詐欺やった御器曽さんって誰かと凄い似てませんか？」

「……正直ボクもそう思うけど、それは言うな」

この空気の読めない妹の名前は、桂木えり。

いや正確に言うならば、妹に〝なった〟と言うべきかもしれない。

元々の彼女の名は、エルシィことエリュシア・デ・ルート・イーマ。

地獄から遥々とやってきた悪魔を名乗る少女だった。

当然ボクとは血の繋がりなど一切無い。

彼女と出会ってからボクは様々な形で四苦八苦させられる羽目になった。

周りの女子に取り憑いた駆け魂を捕まえたり、攻略済みの女子の誰かに宿る女神達を探し出したり、旧地獄の復活を企てるヤバい連中の陰謀を阻止するため過去に飛んだり……

そんな感じで色々と厄介事に巻き込まれては解決していく内、エル

シィはいつの間にかボクの実妹として転生していたわけだ。
しかも最初からボクの妹として生まれてきた、という風に周囲の記憶まで改竄されているときた。もうボクにも何が何やら……。

過去の世界での出来事を振り返る度、そこで対立することとなった結崎香織という人物の一連の言葉を思い出す。
『ゲームの世界なら、自分が幸せならみーんなも幸せでしょう？』
『でも世の中は……みんなが自分のゲームを遊んでいるようなものなの!!』
『みんながひしめきあって、幸せを取りあってる!!』
『幸せになるためには、他の人をギセイにしないといけないのよ!!』
……誰かが幸せになれば他の誰かが不幸になる。そんな香織の抱くゼロサム思考は決して荒唐無稽とは言い難い。
けれど、ボクは彼女の主張を是としなかった。
『お前は……間違ってる』
『すべての人が幸せになる結末が……あるはずだ!!』
『夢みたいなこと言うのね、桂馬くんは』
『そうだ…ボクは夢をみてた……』
『でも見えた気がする…理想のセカイがどういうものなのか…』
『ボクはたどりつかなくちゃいけない。本当のエンディングに』
確かに現実（リアル）はクソゲーだ。理不尽で非論理的だ。
女神を内に宿らせる6人の娘達は、たとえ攻略が済んで記憶を一度消されようとも結局ボクのことが好きだという想いを忘れることは出来ない。
でもボクには現実（リアル）で初めて好きになった相手がいるから、彼女達の想いに応えることが出来ない。
だから皆まとめて突き放すしか無かったんだ……。
しかし、それでもボクは彼女達には幸せになって欲しい。
故にボクはその実現を目指して皆の手伝いをすることにした。
ボクを10年間も想ってくれていた天理は、昔から手品が大好きでプロのマジシャンを志すことに決めたという。

そのためボクは、彼女が実力あるマジシャンに弟子入り出来るようあの手この手で取り繋いだり、将来天理がマジックの本場アメリカに渡って修行する時のために英語を教えたりしている。
他の女神持ち…歩美、かのん、栞、月夜、結に関しても各自の幸せを見付けられるように力を注いでいる。
もちろん大変なこと、思い通りにならないことは山ほどある。
だが、難しいゲームを簡単に済ませようとする奴にハッピーエンドは来ない。
……ボクは落とし神として理想のセカイへと辿り着いてみせる。

〝こちらの囲碁の国際大会は来週に日本で開催されますが、18歳以下のプロによってのみ行われ〜〟
物思いに耽っている内に次のニュースへと進んでいたらしい。これも囲碁の話題だ。
来週に第二回北斗杯が開催されるというものである。
普段の棋戦には全く興味無いが、これは少し行ってみたい。
進藤がこの大会に並々ならぬこだわりを抱いていると知って以来、あいつがここでどんな碁を打つのか気になってしょうがない。
進藤のこだわりようは、単に去年のこの大会で二連敗に終わって悔しかったというだけのものではない気がするから……。
観戦するにあたり一応ちひろを誘ってみることも考えたが、彼女は囲碁を全く知らないからずっと見ていても退屈だろうし、控えておいた方がいいか。
そうなると、進藤の大一番を一緒に見届ける人物は……

＊＊＊

「奈瀬、隣でゲームやってる人は知り合い？」
越智が怪訝な顔で私に尋ねてくる。
「うん。1ヶ月ちょっと前、進藤に紹介されて初めて一局打ったの。塔矢のお父さんの碁会所でね」

本当はもっと前から、彼とは何度も会って何度も打っていたような気がするけど、そんなはずは無いので誰にも言わずにいる。
「ふーん…進藤の友達なら道理で変わり者なわけだ」
越智は無遠慮な感想を漏らす。まったく相変わらず生意気な子なんだから……。
とはいえ、確かに今私の隣に座っている桂馬はそういう風に言われても仕方ない有様だった。
北斗杯の会場まで来て、ゲームをしながら感極まったような目付きで画面を見つめている人間がいれば、まあ誰もが戸惑うだろう。
「へえ～何のゲームやってんだ？」
ゲームマニアの和谷が桂馬に声をかける。
幅広いジャンルの作品をプレイしているらしい和谷でも流石に桂馬が今やっている物は見たことも聞いたこともないはず。
「おそらく知らないだろうが、【ＯｎｅＬｅａｆ】というタイトルのギャルゲーだ」
途端に和谷が目の色を変える。
「え!?お前もやってたのかよ？ヒロインの杉本四葉がひたすら可愛くて健気な奴だろ？」
桂馬の目の色も変わる。
「何!?お前もよっきゅんの良さが分かるのか！」
「ヘッ！当たり前じゃんよ！」
……どうやらこの二人は奇遇にも嗜好が一致したらしい。その後もノリノリで会話に花を咲かせている。
越智はそうした様子を目の当たりにして呆れたような表情を隠そうともしない。

北斗杯の予選で私は、小宮とフクに勝った後に越智や和谷と当たった。
越智は相変わらず強かったし、和谷も昨年越智にプロとしての矜持を見せられたことで奮起したらしく越智に引けを取らないほどに腕を上げていた。

私はこの二人には奇跡的に辛勝したものの、その後に社くんに負けてしまったというわけだ。
年齢的に北斗杯へ出場する最後のチャンスだっただけにとても悔しくて悲しかった。
今でも辛い気持ちは若干残っているけど、進藤達を応援するために観客としてここに来たのである……。

「お前ら先に来てたのか。探したぜ」
「さっき楽平（レエピン）と会ってきたんだけど相変わらず和谷そっくりだったなぁ」
ここで本田くんと伊角くんのご到着だ。
小宮とフクは用事があって来られないので、これで全員揃ったことになる。
楽平というのは今回の中国チームの三将を務める男の子。
昨年大将だった陸力（ルーリイ）が１９歳となったことで参加資格を失ったため、前回副将だった王世振（ワンシチェン）は大将へ、三将だった趙石（チャオシイ）は副将へと繰り上がった。
よって楽平が三将に抜擢されたらしい。……どうでもいいけど、ドッペルゲンガーなんじゃないかと思うくらい和谷と激似だったな。
韓国チームは面子自体は変わりないものの前年に副将だった林（イム）日煥（イルファン）が、三将だった洪秀英（ホンスヨン）に席を譲っている。
洪秀英は元々プロ入り後まもなくして九段を破るなど才覚の片鱗を見せていたが、現在は自国の高段者達を軽々と蹴散らしており、タイトル戦に参加する日も近いと言われているそうだ。
そして、我らが日本チームについて一つ驚くべきことがある。
なんと今年は中国戦、韓国戦、その両方で進藤が大将をやるというのだ。
……確かに進藤の実力が塔矢に劣ってるとは思わないけど、安定感ならちょっと塔矢が上のような気もするんだけど。
私達がその件でチーム団長の倉田九段に話を聞いてみると、あの人は……

『え?だって進藤が去年に自分を負かした連中をギャフンと言わすとこ見たいんだもん』
あっけらかんとこう答えた。私は開いた口が塞がらなかった。
しかも塔矢までこの話を持ちかけられた際には「僕としても進藤が侮られたままなのは我慢なりませんから」と二つ返事で承諾したという。
塔矢はああ見えてかなり我の強い性格らしいし、倉田さんに仕方無く同調しているわけではなく、本心から賛同しているものと思われる。それに例の碁会所では、たかが初段と進藤を軽んじた人に対して憤りを見せたこともあったとか。
……この二人と進藤本人が納得してるならいいけど、他の人達が采配に何を言うか心配だなぁ。特に今や”魔王”とまで称される高永夏が相手の時に。
総括すると各チームのメンバー及びポジションは、
・日本
大将：進藤ヒカル　二段
副将：塔矢アキラ　五段
三将：社清春　二段
・中国
大将：王世振　五段
副将：趙石　四段
三将：楽平　三段
・韓国
大将：高永夏　五段
副将：洪秀英　三段
三将：林日煥　五段
ざっとこのようになるはず。
「そういえば進藤って何で少し前まで初段だったんだ?あいつの強さならさっさと昇段しそうなものだが」
桂馬が疑問を口にする。
彼は碁もかなり打てるということや同い年なのも相まって和谷と

は意気投合したみたいだ。元から和谷は人と打ち解けるのが早いタイプだしね。
「それがあいつ一時期3ヶ月近くずっと手合いをサボってた時があったんだよ。そのせいで不戦敗がたくさん積み重なったから中々上がれなかったんだ」
「……進藤がサボり？あの寝ても覚めても碁のことを考えてそうな囲碁バカが？」
「そうそう、不思議だろ？理由聞いても本人は答えないし、結局誰も詳しいことは知らないんだ」
「そうなのか……」
私も進藤が、何かに苦しんで碁からずっと遠退いていた時期があったのは知っている。中国棋院での特訓から帰ってきた伊角くんと打って立ち直ったことも。
復帰してからの進藤は心なしか顔付きがぐっと大人びたような気がする。
……本当に何があったのかな？

開会式も無事終わり、日本ＶＳ中国の一戦が始まろうとしている。
解説は前回と同じく渡辺八段が担当するとのこと。
解説室でのモニターは三つの対局に応じてそれぞれ二枚ずつ用意されている。
盤面を映すための物が一枚、画面二分割で両選手の顔を映すための物が一枚。越智曰く後者は去年は無かったらしい。
対局室で大将から三将まで全員が着席した今は、選手を斜め前から映すような角度でカメラが固定されており、画面では彼らの上半身だけが見える。
これらの映像はテレビでの放送の際にも利用されるそうだ。
こうしてピリピリとした緊張感の中、戦いは始まった。
客席でまず感嘆の声を上げたのは本田くんだった。

「社の奴……今年は打ってきたな」
社くんが放った初手天元に対して、相手の楽平は鋭い目付きで考え込んでいる。
楽平は幼く見えるけど、伊角くんが中国棋院にいた頃には彼と何度も対局しては勝ったり負けたりといった好勝負を繰り返したらしい。決して油断出来る相手ではない。
中国側の大将の王世振は序盤から積極的に進藤を攻め立てる。
どうやら前回進藤と打った時と同じように早めに優位な状況を作ってから逃げ切ろうとしているみたいだ。
逆に副将戦は、塔矢が早い段階から趙石に攻撃的な手を仕掛けている。
趙石はそれを凌ごうとして防戦一方。
「ねえ桂馬?あんたは目の前の戦いに興味無いわけ?」
ふと私は隣でずっとゲームに熱中している彼に聞く。この場では明らかに浮いている。
「心配しなくてもちゃんと見てるさ。一手一手の意味を考察しながらな」
……そういえばこいつは、学校でも授業中にずっとゲームをしているのにテストでは全科目満点を取るという憎たらしい奴だったわね。
「それに…」
桂馬は口の端を微かに緩める。
「ボクの予想通りなら進藤と塔矢はワンサイドゲームを繰り広げることになる」
完全に確信しているかのような口振りだった。
それからしばらく後に渡辺先生が一段と声を張り上げる。先程の桂馬の言葉を証明するように。
「おお!塔矢五段はリードをどんどん広げています!趙石四段の追随を全く許しません!」
塔矢は趙石に圧倒的な大差を付けている。趙石は懸命に粘って一子報いようとするも、塔矢はそれを力強く撥ね退ける。
やがて趙石は俯きながら投了を表明。

「あの趙石をあそこまで……塔矢はやはり恐ろしい奴だ」
伊角くんは目を見張っている。中国棋院では趙石とも打ったことがあるそうだけど、三回に一回しか勝てなかったそうな。
趙石が手も足も出ないまま敗北する光景が伊角くんにとって衝撃的だったのも無理はない。
一方、進藤はというとこちらも王世振を完膚無きまでに翻弄していた。
昨年の副将戦では途中まで緊張の抜けなかった進藤がやられっぱなしで、王世振に必死に追い付こうとしていたようだけど、今回は追う側と追われる側が逆だった。
更に言えば昨年の進藤は一念発起して怒涛の猛追を仕掛けていたけれど、今の王世振は進藤との差を全然縮められていない。むしろ足掻けば足掻くほどに差は広がっていく。
軽く見積もっても15目前後の差が付いた所で、こちらも蚊の鳴くような声で投了した。茫然自失の表情で虚空を見つめている。
「よっしゃあ！日本チームの勝利確定だぜ！」
和谷が喜びを口にする。伊角くんも安心したようにため息を吐く。
他の客席のあちこちからも満足げな声が聞こえてきた。
渡辺先生は残る一局に解説を絞る。
「社二段の素晴らしい所は、自らの奇手を最後の最後まで効果的に活用する所にあると言えるでしょう。これは緻密な計算が無くては不可能なことです」
「あいつの初手天元後の打ち方は本当に参考になるなぁ」
本田くんが声を弾ませて社くんを盛大に褒める。
こうして三将の社くんも問題無く勝利を収めた。
相手の楽平は悔し涙を流しつつも毅然とした顔付きを崩さなかった。
中国戦は、日本側が3人共に白星を勝ち取って終了。
中々に好調な滑り出しと言えるだろう。
「うーん…ワンサイドゲームになるとは言ったが、流石にあそこまで

のオーバーキルは予想外だったな」
桂馬は大将のモニターにちらりと視線を向けた。そこでは未だ王世振が土気色の顔で佇んでいた。
彼は魂の抜けたような面持ちのまま、中国チーム団長の楊海(ヤンハイ)八段に支えられて何とか立ち上がる。まあいつまでもあそこに座らせておくわけにはいかないからね。
経緯を知らなければ、極度の高所恐怖症の人が無理矢理スカイダイビングをやらされた後なのかとでも思ったかもしれない。
おそらく前回は曲がりなりにも打ち負かすことに成功した進藤を相手に惨敗してしまったのがよほどショックだったのだろう。
なお倉田さんに以前聞いた所によると、彼は去年もあわや逆転されかねない所まで進藤に巻き返されたことで、精神的に大きなダメージを受けたとのこと。その後はメンタルがボロボロのまま韓国に挑む羽目になったという。
あの様子を見る限り、王世振が今年も同じ運命を辿ることになるのは間違いない。……うん、御愁傷様。
「やれやれ…明日こそが山場だってのに誰も彼も浮かれすぎでしょ」
越智が腕組みしながら鼻で笑う。
そんな彼も社くんが勝利を飾ったのを見て小さくガッツポーズをしていたのだが、それは言わないでおいてあげるとしよう……。

ＦＬＡＧ．ＥＸ２　第二回北斗杯（後編）

――翌日――

「あの高永夏とかいう奴はまさにチート級の怪物だな」
桂馬はいつも通りゲームをしつつも眉間に皺を寄せている。私も同じ気持ちだった。
「気に入らないけど、それは認めざるを得ないわね……」
数ヵ月前、高永夏は十代にして”国手”というタイトルを獲得していた。
国手とは元来、「国で一番の打ち手」という意味の込められた称号らしい。
国手のタイトルを持っている＝その国で最も強い棋士、などという安易な図式はもちろん成立しないが、それでも国内有数の打ち手であることは疑う余地も無い。
その比類無き躍進ぶりと実力に裏打ちされた尊大無比な言動から、現在彼は自国にて”魔王”と畏怖されているという。
「フンッ…魔王だなんて実に大層な通り名じゃないか。仰々しい異名を自ら名乗る輩など大方ろくなものではない」
「いや別に本人が名乗ってるわけじゃないみたいだし、そもそもあんたに人のこと言えるの……？」
高永夏は、昨日午後には中国チームの王世振を大将戦で一蹴した。終始露骨につまらなさそうな佇まいで打っていたが、そんな不遜極まりない姿すらも様になっていたのが何だか癪に障った。
韓国チームの副将と三将も勝利し、彼らもまた中国を相手に３―０のストレート勝ちを決めたのだった。
……ちなみに桂馬は、中国と韓国の一戦には興味が無かったらしく午後になる前に帰ってしまっていた。
日本ＶＳ韓国の幕が開けるまで残り数分程度。

選手達は既に対局室に集合しており、カメラは着席前の選手達の様相を写し取っている。
そこで高永夏は、進藤を前にするなり獣性を剥き出しにしたかのような獰猛な笑みを浮かべた。冷めた薄笑いを顔に貼り付けているような気取った男だと思っていたけれど、あんな表情も見せるのか。
向こうは向こうで、かつて棋士として無名の存在でありながら自分を敗北寸前まで追い込んだこの歳下の少年に対して、強烈な対抗心があるのかもしれない。
一方の進藤は落ち着き払った真剣な表情で相対している。その立ち姿は厳かな風格すら漂わせていた。
両者は一言も発することなく静かに対局の開始時間を待っている。
しかしながら、解説室の方は全く静黙とは言い難かった。
「嘘だろ?ここで進藤をぶつけるなんて高永夏相手に去年と同じことを繰り返す気か?」
観客が騒ぎ出す。
「昨日だけじゃなくて今日まで、あいつが塔矢アキラを差し置いて大将だと?冗談じゃないぞ!」
進藤も今ではそれなりに名を上げているので中国戦で進藤が大将であることには納得していた人達でも、最大の強敵たる高永夏には流石に塔矢アキラを当てるはずだと思っていたに違いない。
「好き勝手言ってんじゃねえ!その若先生…じゃなくて塔矢アキラが実力を認めたからこそ進藤が大将やってんだろうが!」
進藤を庇う人もいた。あの人は塔矢の碁会所で進藤と憎まれ口を叩き合っていた人だ。
「そうだぜ!ゴチャゴチャ言ってる奴は去年進藤が接戦を繰り広げたのを知らねえのかよ?」
え…?あれって確か進藤がプロ試験を受けた時にやたらビビってたヒゲゴジラじゃないの?
「ハッ…どうせあんなのまぐれだったんだろうよ」
「何だと!?」
今度はサングラスと顎髭が印象的な男性が吠える。

「河合さんだ！今年も来てたんだな……」
伊角くんが呟く。
「知ってる人？」
私が聞いてみると和谷が教えてくれた。
「進藤がプロ試験の本選でやっていけるように碁会所で鍛えさせてやってたことがあってさ。その時に知り合ったんだ」
なるほど。進藤は妙に強面の人達から好かれてるなぁ……。
すると今度は、私達の前の席から会話が聞こえてきた。
「私としては進藤二段も強いと思うんですがねぇ…」
「でも進藤選手の経歴をちょうど昨日見たテレビで知ったんですよ。どうやら彼は囲碁を始めたのが小学六年生の冬で、プロになったのが中学三年生の４月らしいんです」
「それがどうかしたんです？」
「つまり彼は今の所、プロ歴は2年ちょっと、囲碁歴すらたった４年半ってことですよ。これはちょっと経験不足が響くんじゃないかと」
何も言い返せない……この年齢層の棋士において一年一年の積み重ねの差というのは非常に大きいのも事実だったから。
確かに進藤は非常に優れた素質を持っている。ただ、この大役を担うにおいて経験不足な面があるのは否定出来なかった。実際、進藤の力には些か波がある。
かつて飯島くんが「急に成長する奴はよく転ぶ」と言っていたことがあるのを私はふと思い出した。もっともあの頃の私達は、進藤がここまで成長するだなんて夢にも思っていなかったのだけど。
別室の進藤には聞こえていないだろうとはいえ、それでも決して好ましくない空気が観客達の間に蔓延しつつあったそんな時……
〝やめて…争うのはやめて…〟
場違いな可愛らしい声が会場内に響き渡った。
その声は、桂馬が大音量で手元のゲームから流した物だった。
言い争っていた人々は虚を突かれ、戸惑いを見せる。

「よっきゅんはこう言っているが、必ずしも争いが悪いことだとは思わない」
桂馬は何食わぬ顔でゲームを操作しながら口を開く。
「だが、今この場でボク達モブキャラが争った所で何も生まれないのは確かだろう」
そして顔を上げて宣言した。
「最終決戦においてモブに出来ることは唯一つ……主人公とラスボスの戦いを見守ることだけだ！」
……客席が沈黙に包まれる。まるで誰もが声の出し方を忘れてしまったかのような光景だった。
皆おそらく完全に納得したわけではないのだろうが、ばつの悪そうな顔で大人しくしている。進藤を批判していた人も、言い返していた人も。
「そもそもよっきゅんって誰？」と言いたげな顔の人もいる。
和谷はニッコリしながら桂馬にサムズアップした。
「……魔王に打ち勝つ勇者になれよ、進藤」
桂馬がそう小声で呟いた時、ちょうど対局が始まる時間となった。
「代表選手の皆様方は、指定の席に着かれるようお願い申し上げます」
アナウンスの声がこちらにも聞こえてきた。優勝のかかった大一番の開幕を告げる合図だ。

ニギリの結果、大将戦は進藤が白を持つことに決まった。従って副将の塔矢が黒、三将の社くんは白となる。
黒を手にした高永夏の第一着に対して、進藤も間髪入れずに打ち返す。
しかし、その後は二人とも一手一手に大変長い時間をかけている。どちらも持ち時間をフルに使うつもりのようだ。
両者共に現在は、普段の性格に似つかわしくない慎重で繊細な碁を打っている。
……それがいわゆる嵐の前の静けさに過ぎないことは、彼らの熱い闘志に満ちた眼差しを見れば明らかではあったが。

大将戦に長らく大きな動きが無いからか渡辺先生は、今の所は副将戦をメインに解説を語っている。
ちなみに三将戦は長時間に渡り一進一退の攻防を展開中。
「一見互角の勝負を演じていたように見えた副将達ですが、塔矢五段の先程のこの二段バネが実は伏線となっていたわけであります。あくまで伏線の一つ……でしょうが」
塔矢と対峙していた洪秀英は今、血の気の引いた顔付きで盤面を凝視している。
「いつの間にか１０目以上、黒の塔矢がリードしてるみたいだね」
「まったくだ……普通はこれだけの差が一気に付く前に黒が何か鋭い手を打ったか、あるいは白が致命的なミスをしたかっていう明確な分かれ目がハッキリあるはずなのに」
「一体いつの間にこんな差が付いたんだって感じだよ。渡辺先生でさえ今一つ理解しきれてないみたいだぜ？」
「あっちの副将はもうすぐ投了しそうだな」
越智、伊角くん、和谷、本田くんが順々に戦評を述べる。
私も塔矢の白星はほぼ確定だと安堵していた。
……ところが、当の洪秀英はまだ諦めていない様子であった。
しばらく長考した後、彼は鋭く白石を打ち下ろす。鬼気迫る形相で塔矢に食らい付く。
塔矢は動じることなくコンピューターのように、正確に冷徹に応手を返す。それでも一歩一歩ほんの少しずつ差は縮まりつつある。
負けることは無いだろうけど、ちょっと不安になってきたかも。
「社二段は終盤にきて若干厳しい状況に陥ろうとしております。でも勝機はまだ残されているはず！」
三将の社くんと林日煥の対決は、ずっと均衡を保っていた。
しかし現在、社くんの旗色が徐々に悪くなり始めている。このまま挽回出来なければやられてしまう。
……どうか希望を捨てないで欲しい。そんな私の願いが叶ったのか、社くんは崖っ縁に踏み止まるように反撃の一手を繰り出した。
林日煥は眉をひそめる。これで勝負は分からなくなった。

三将戦が佳境を迎える中、副将戦は勝敗が決したようだ。洪秀英が投了したのである。
やはり必死に追い縋ろうとも、塔矢に途中付けられた差が大きかったのは致命的だったらしい。
その上、逆転を狙った手のほとんども塔矢は的確に潰していた。
洪秀英はぎゅっと目を閉じて唇を噛み締めている。
「社二段……雄々しく健闘しましたが、どうやらここまでのようです」
一方の社くんは敗れてしまった……。
テーブルの上に置かれた固い握り拳は、彼の胸が詰まるような想いを代弁していた。
社くんは沈痛な表情で立ち上がる。林日煥もその後に続く。
塔矢と洪秀英も既に席を立っている。
モニターには映っていないが、皆がどこへ行ったのかなど火を見るより明らかである。
「両チームの命運は進藤二段と高永夏五段の手に委ねられました！」
日本、韓国共に代表選手達は後ろから見守っているのだろう。
……彼らの行く末を左右する両大将の死闘を。

進藤と高永夏はとてつもなく高度な駆け引きをしている。
月並みな表現ではあるが、私にはそうとしか言えなかった。
戦況を分析しようにも一挙一動があまりに精緻すぎる。
幾ら頭を回転させようが知恵を振り絞ろうが、かなり後になってやっと二人の行動の意図を理解することがざらだった。
今ここにいる私達の中で一番の実力者の伊角くんですら着いていけないのだから、私の理解の範疇を軽々と超す一局であるのも当然と言えば当然なのかもしれない。
渡辺先生も「先程の小競り合い……何らかの狙いがあったのは確かですが」「進藤二段は何重の思惑を込めていたのやら…」などと困り顔で言葉を絞り出すだけで、もはや解説の体を為していない。
さながら、黒と白で形作られた途方も無く広大な宇宙を目の当たりにしているかのようだった。

それでも私はこの対決から全く目が離せない。瞬きをするのすら忘れて魅入ってしまっていた。
戦術、戦略のレベルが高過ぎるだけだったら、こんなに取り憑かれたように見つめることは無かっただろう。
何故かこの一局には不思議と魅力があるのだ。あたかも数多の人々を惹き付けて止まない芸術作品の如き魅力が。
もちろん本人達は死に物狂いで打っているというのは分かる。汗が顔面を伝う様子はモニター越しでも確認出来た。
……それでも思う。私もいつかあんな碁を打てるようになりたいと。無限の可能性を前にして、嫉妬を通り越した憧憬の感情が心中を満たす。
「もはや何も分からない。でも綺麗だ……」
桂馬が独り言ちる。彼はもうゲームを止めていた。
固唾を飲んで手に汗握りながら、食い入るように眼前の奇跡を熟視している。
今や観客の心は一つ。その気になれば触れられそうなほどの熱気が会場を支配する。
「今これだけは言えます！二人は幾度と無く半目を取り合っている！そして、この戦いはもう決着の時が近い！」
私の目から見てもそれだけは間違いない。
二頭の龍が互いの尾を食み合うようなこの血戦は、今まさに終焉に至ろうとしている。
どちらが勝つのかなんてこの世の誰にも予想出来ないはずだ。
「……こ、これにて終局のようです!!」
渡辺先生の声が震えている。
気付けば、私も膝の上に置いた手が震えていた。
「これは……整地を待たなければ勝敗は分かりませんね」
盤上の死石がアゲハマとなり、他の石はカチャッカチャッと綺麗な形になるよう寄せられてゆく。
作業は淀み無く円滑に進められているのにも関わらず、やけに鈍々と行われているように感じた。

「一体どっちが勝ってるんだ!?」
「クソッ!まだ分からねえのかよ?」
不安と期待の入り雑じった囁き声が聞こえてくる。
もう地の数を計算するだけの段階に入っているようだ。
どちらが勝っていてもおかしくない状況であるが故、結果を直視するのが怖くて私は恐る恐る二人の表情を伺う。

何かを堪えるように悲痛な面持ちで歯を食い縛っている進藤。
対する高永夏は穏やかな笑顔を浮かべている。普段見せる冷めた笑いとも、開戦前の獰猛な笑みとも違う満足げな顔。
二人の表情の差から私は最悪の結末を察して目を伏せる。

「……これは白の半目勝ちです」
え……?
私は反射的に顔を上げる。
「勝者は進藤ヒカル!よって優勝は日本チームです!!!!」

数秒の静寂……。
そして耳を劈くほどの歓声と万雷の拍手が鳴り響く。
「よし!進藤が勝った!!」
あの越智すらも和谷、伊角くん、本田くんに混ざって狂喜乱舞している。
更に桂馬まで目を輝かせて手を叩いている。
……私はというと泣いていた。言わずもがな嬉し泣きだ。良かった……本当に良かった!
日本チームの面々、特に大将への惜しみない称賛は続く。
韓国囲碁界始まって以来の天才を打ち破り、日本を優勝へと導いた存在。

今この時を以て、進藤ヒカルという一人の棋士が伝説にその名を刻んだ。
この少年はいずれ世界に名を轟かせることになる…そう誰もが確信した時だった。

進藤の身に異変が起きる……。
突如その体が前のめりに大きく揺れた。
最初はただ一礼しているのかと思ったが、そうではなさそうだ。
何故ならその目があまりにも虚ろだったから。しかも椅子の肘掛けを不自然なまでに力強く掴んでいる……必死にしがみつくかのように。
更に次の瞬間、進藤の体は今度は左に傾き始めた。そのままゆっくり椅子ごと横転してしまう。
横倒しになったことで、画面から進藤の姿が見えなくなったので様子はよく分からない。それでも彼が倒れたまま起き上がってきていないのは確かだった。
誰の目から見ても明らかに異常な事態だ。
「……ヒカル!!!!」
静まり返った部屋に女性の悲鳴が木霊する。女性は慌ただしく部屋を飛び出して行った。
その人が進藤のお母さんだと知ったのは後のことだった……。

「まったく君という奴は……！勝っても君にもしものことがあったら意味無いだろう！」
「だからゴメンってば、塔矢！こうやって元気になったんだから許してくれよ……」

ここはとある病院の一室。
進藤はあの後救急車で運ばれ、ここで入院することになった。
倒れた際に頭部を打ったものの幸い軽傷で済み、検査によれば後遺症の罹患の可能性も極めて低いという。
失神の原因が過集中による酸欠だったと判明したため、塔矢はこうして激怒しているというわけだ。
まあ彼は、進藤が意識を取り戻すまで心ここにあらずと言わんばかりの青ざめた顔をしていたから、心配をかけた進藤に怒りたくなるのも無理はない。
今この病室にいるのは私以外には塔矢、社くん、洪秀英、和谷、伊角くん、本田くん、越智、そして桂馬。
桂馬は例によってゲームをしている。やっと安心してゲームが出来るというのは本人の弁。
進藤のお母さんは既に面会を済ませており、私達はその後に立ち入らせてもらった。
「にしても進藤…最初前に倒れそうになってたよな？あのままテーブルに倒れた方がマシだったろうに何で踏み止まって横いったんだよ？」
本田くんが皆の疑問を口にする。
「あのまま前にいったら碁盤の上に倒れちゃうじゃん？あの一局を壊したくない！って一瞬思っちゃってさ」
「うーん…気持ちは分かるけどよ……」
「もう整地も結果発表も終わって、どうせ後は片付けるだけだったのに馬鹿だねぇ君は」
そうやって嫌みを言う越智も、進藤の安否を知るまではそわそわしていたと思うと可愛い。
「とりあえずは来年の北斗杯でもお前と一緒に戦えるの分かって一安心や」
「君は来年も選手になるつもりでいるのかい？予選で僕に負けないよう気を付けるといい」
越智は今度は社くんに絡む。

「何や？そう言う自分はまずそこの姉ちゃんにリベンジせなあかんやろ」
「フッ…もちろん奈瀬にも来年こそは勝つさ」
「年齢的に来年私はもう出られないんだけどね」
「あっ……ま、まあ若獅子戦辺りでも当たる可能性があるからな。その時に雪辱を果たすよ！」
……クールに決めた所なのにごめんね、越智。
「ほな進藤が元気なんは分かったし、新幹線の時間近いから失礼するで」
社くんは先に帰って行った。
次に洪秀英がおずおずと口を開く。彼は流暢な日本語で言葉を紡いだ。
「進藤、ちょっと話がある」
「何だよ秀英？」
「永夏が言ってたよ、お前の力には感服したって。それと去年は本因坊秀策を侮辱するようなことをあの場で言って悪かったって」
「あの野郎！詫びるなら進藤に直接言いに来いってんだ！」
和谷が憤慨する。
詳しい裏事情は私達も倉田さんから聞いている。
日本棋院記者の古瀬村さんのミスが発端で起きた通訳トラブルによって、本因坊秀策を馬鹿にしていると誤解されたのは確かに気の毒だ。
でもその後、進藤を煽るために敢えてそれを訂正せず喧伝したのは酷いと思う。
「いや、いいんだ。それに本当なら先に謝らなきゃいけないのはオレなんだよ」
「進藤？」
「あいつがインタビューで秀策のことを貶したって誤解してた時に凄く睨んじゃってたんだ。永夏がオレのこと煽りたくなったのもそれが原因なのかも」
「でも、だからって……」

「それにオレとあいつが互いに顔を突き合わせてごめんなさいってするのも何かしっくり来ないだろ？これでいいのさ」
「ありがとう……進藤」
洪秀英は進藤に深く感謝した後、次は塔矢に向き直る。
「それと塔矢、これは僕から伝えたいことなんだけど……」
「ん？何かな？」
「お前も進藤のライバルなんだってな？ならお前は僕にとってもライバルだ。次は勝ってやる！」
「ああ…受けて立とうじゃないか」
「秀英、オレともまた打とうぜ！」
「うん！じゃあな！」
晴れ晴れとした顔で彼も出ていった。

「……また本因坊秀策か」
ずっとゲームに興じていた桂馬がここで言葉を発した。
「お前に囲碁指南を受けてた頃から思ってたけど、あまりにも秀策にこだわり過ぎじゃあないか？」
彼はいつになく真剣な表情で進藤を見つめている。
「お前にとって本因坊秀策は碁を打つ理由となる存在だと言っていたが、あれは一体どういうことなんだ？」
軽々しい気持ちで聞いているわけでないのは確かだった。
「そうだな桂木……お前にもいつか話すかもしれない。塔矢の後になるだろうけど」
桂馬は黙り込んでそれ以上追及しなかった。
しかし、ここで勢い良く反応する者が一人……。
「僕の後に話す…だって!?そういえば、君の中にｓａｉがいると僕が言った時にも、いつか話すとか言ってたな？もしや本因坊秀策とｓａｉには何らかの関係があるのか!?」
「い、いや…それは……」
「おい進藤！お前が俺とｓａｉのやりとり知ってたのって、やっぱりお前とｓａｉに何か繋がりがあるからなんじゃないのか？」

和谷まで食い付く。
「だー!!こっちは病人なんだから勘弁してくれぇ!!」
進藤は耳を塞いで叫ぶ。
「……よく分からないけど、進藤って隠し事するのが絶望的に下手だよな」
伊角くんが一歩引いた位置で苦笑しながら呟いた。
私も心の底からそう思います……。
こうして仲間と戯れる進藤を見ていると、私達の目の前であんな壮大な碁を打っただなんてとても信じられない。
でも間違いなくあの一局は進藤が作り上げたのだ。
あれほどの碁を目の当たりにしたら、北斗杯に出るチャンスを逃して自分がくよくよしていたのが小さなことのように思えてきてしまった。
「……今から打ちに行くわよ、桂馬!」
打ちたい……とにかく今は碁が打ちたい!
いつか北斗杯を遥かに超える大舞台でも私の碁を打ってやるんだから!
「うむ、今やってるゲームもちょうどクリアした所だしな。いいだろう」
「とりあえず最低でも十局は打つからね!」
「いや無茶を言うな!そんなの日付変わるわ!!!!」

＊＊＊

「うわぁ!?また無限世界に戻されちまった!」
「もう七度目だな。ルートを推定せずに無数の選択肢を乱雑に選ぶからこうなるんだ」

「じゃあどうすりゃいいんだよ？」
「この場合はヒロインとサブヒロインの信頼関係だけではなく、二ノ宮の研究機関と天草の一族の政治的関係も含めて推測する必要がある」

ここは進藤の家。更に言えば進藤の部屋である。
北斗杯で優勝した祝いとしてオススメのギャルゲーを本体ごと買ってやったのだが、進藤は自力では全然進められないらしく、ボクがこうして見てやることになったというわけだ。
……とはいえ初心者にしてもあまりに酷すぎる。こいつは碁以外のことには頭が働かないのか？
「ダメだぁ……ぜんっぜん分からねえ！」
まあ嘆きつつも投げ出さないのは褒めてやろう。
気分転換に別の話題を振る。
「それはそうと明日美の奴どんどん強くなってないか？」
「ああ、奈瀬は最近また一皮剥けたような気がするんだよな」
あの後ボクは明日美と何局か打ったが、こちらが置き石を一つ置いているにも関わらず歯が立たなかった。
悔しいが今度打つ時には置き石を増やす必要があるかもしれない……。
「なあ進藤？」
「何？」
「囲碁には必ず勝者と敗者が存在するよな？置き碁や定先でも無い限り」
「そりゃまあ……碁は二人で打つものだからな。囲碁っていうのは負ける人もいるから成立するんだ」
「どっちかが幸せになれば、もう片方が不幸になるわけだ」
「……何が言いたいんだよ？」
「いや別に……。勝負の世界とは厳しいものだと思ってな」
ボクはいきなりこんな話を進藤にして何を考えているんだかな。
少しばかり香織に毒されているのかもしれない。

「でも負けた方が不幸に感じてるとは限らないぜ？」
確かに高永夏は進藤に敗北してもどこか満足げに見えた。
それに進藤と塔矢は互いに負けることがあったとしても、いやむしろ負けることがあるからこそ自身の実力と気力を高められている部分がある。
「勝った方も負けた方も気持ち良く前に…未来に進める碁がオレの理想さ。まあ、そうならなかった時もあるんだけど……」
中国チームの大将として進藤と戦った王世振などはその一例だろうな。あの男は進藤に敗れて、しばらく惨めな思いを引きずることとなった。
無論打ち負かしたことについて進藤には後悔など一切無いだろうし、勝負の世界に生きる者同士として全力をぶつけなければ逆に失礼なのは言うまでもない。
それでも流石に王世振が敗北後ずっと苦悶を抱えているのを知った時には、進藤は何とも言えない顔をしていた。
「オレは別に相手をあんな風に絶望させたかったわけじゃない。もし叶うなら負けた側にももっと熱い気持ちでいて欲しかった。……考えが甘すぎるってお前なら言いそうだな」
「いや……甘いとはこれっぽっちも思わない……」
進藤もまた現実（リアル）というクソゲーの中で理想のセカイを望みつつ、悩み傷付きながら生きる一人の人間。
「佐為は――遠い過去から来たあいつは、誰よりも囲碁を楽しんでたなぁ」
進藤は独り言のように呟く。
佐為とやらが誰なのかボクは知らない。知りたいとも思わない。
今この場において重要なのはそんなことじゃないから。
「もう夜だからボクは帰るぞ？」
「おう、またな！」

そういえばエルシィ…じゃなくて、えりとハクアは今の時間もまだ碁を打ったりして遊んでいるのだろうか？
それとも一緒に家（うち）の店を掃除していたりするのだろうか？
たとえハクアがエルシィのことを忘れてしまったとしても、思い出なんてまた作ってしまえばいい。
あいつらは本物の親友なんだから……。

さて、帰りに一つゲームを買っていくとするか。